
恋姫無双で就職中！

倉屋敷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双で就職中！

【Nコード】

N5248Z

【作者名】

倉屋敷

【あらすじ】

高額なアルバイトありますとの謳い文句にほいほい釣られてしまった主人公、倉屋敷直衛は流されるままに流されて契約書に拇印をしてしまう。悲しいこと（？）にその契約書は新世界への旅立ちへの許諾証であり、直衛は異世界である恋姫無双の世界へと飛ばされてしまう。

第一話 日当3万＋出来高払い

「お、その辛気臭そうな顔したお兄さん、いいバイトがあるよ？ちよつと聞いていかなかな。日当3万＋出来高払いの優良アルバイトだよ？」

と、大学からの帰宅途中に如何にも怪しげなおじさんに話かけられた。

辛気臭そうで悪かったな！

こちらとら、もう12月だっていうのに就職先も決まってないんだよ！

辛気臭い顔してるに決まってるだろ！

「んー、そんな怪しそうな顔をしないで。バイト代があからさまに高額過ぎるのが気になってるんだろ？それも当然、もうクリスマス間近だからね、人手不足もいいところなんだよ！だからこそ、高額で、且つ暇そうなお兄さんに声かけしているわけなんだけど」

クソ！

気にしていることばかり言いやがって。

確かにクリスマスには予定はない！

今年も今年でクリスマス爆発しろっていう係りだから俺は！

だけど、暇なのは事実だし、バイト代が高額なのも事実。

癪に障ることばかり言われていたが、これはこれでいい臨時収入になるか。

「お兄さん乗り気だね？いい顔になってきたよ。作業内容は現場についてからでいいかい？まあ、バイトだから上の指示に従って汗を流してくればいいだけなんだけどね」

ん？作業内容がいまいち分からないな。

クリスマスにすることだから、たぶんケーキを作ったり、なんなりだとは思っただけ。

もしかしたら、商品の売り子？

いやはや、辛気臭い顔の奴に売り子はさせないから、やっぱり単純作業が力仕事のどちらかな？

何はともあれ、バイトにさせる内容は単純なものであろうから気になくていいか。

「お兄さんがこのバイトをどう捕らえているかはわからないけど、慣れれば大したことはないよ？一日でも過ぎたら嫌でも理解できるはずだからね。はい、やるという方向で問題ないのならこの紙に必要事項を書いてね」

まだ何も答えてないのだが、名前だとか住所だとか雇用契約用の用紙を渡された。

相変わらず雰囲気流されやすい性格だなあと実感。

とりあえず、記入してみようか。

それはいいんだけど、こんな冬空の下、バンダー片手に何故書かないといけないんだ。

先に現場につれていってくれても良さそうなのに。

「そうそう、氏名、年齢、住所・・・あとは給与の扱いかな？一括払いがいいか即日払いがいいか。他には・・・ああ、裏面にアンケートがあるからそれにも答えてくれると嬉しいかな？なくてもいいんだけどね」

給与かぁ・・・一括なら一度に大金を手に入れれるし、即日も即日で悪くない。

けど、一括払いの方がお年玉つぼくていいかな？

それで、これがおじさんに言われたアンケートか。

なにになに・・・

【貴方を三国志の武將に例えたとき、その能力値はどの程度でしゅうか。300ポイントを、武力、統率、知力、政治、魅力に振り分けてください】

んーこれって何もバイトに関係のないことだよね？

だから答えてくれると嬉しいとか、そういうことなのか。

このおじさんの上の人が、三国志好きなのかな？

俺も好きだけどさ。

それで、能力の振り分けか。

300ポイントってことは平均値にすると60な訳だけど、流石にそれは安直過ぎるかな。

かといって、極端にしようにも・・・悩むなあ。

こういうときは自分の好きな武将を参考にするのがベスト。

俺は、典韋とか張任とかの義理深い武将が好きなんだよね。

忠誠を誓って主君の為に戦うっていう、なんというかカッコいいよね。

というわけで、

【武力：100 統率：1 知力：98 政治：1 魅力：100】
にしました。

だって、こういったオリジナルの新規武将ってのは自分の理想を現実投影している訳でしょ？

俺には、兵を統率するなんていうことはたぶん無理だと思う。

政治も無理かな？閃き！っていうのはいいと思うけど、政治って所謂知識でしょ？

勉強はあまりとくいな訳ではないんだよね。

だから、直感で戦う戦闘狂みたいな感じでこの能力振りに！

魅力を限界まで振ったのは言わずも・・・クリスマスに独り身は辛いよ？

それで、次の設問は

【仮に、何でも願いが叶うとした場合、貴方が叶えたい願いとは何かお答えください】

ん？なんだこれは？

「お兄さんもその設問で躓きますか。その設問は、単純に一つ願いが叶うならば、と考えれば良いです。前に記入していただいた方は、金銀財宝が欲しいだとか、新世界の神になりたいだとか、魔法が使えるようになりたいだとか、そういったことを書かれましたね」

つまり、欲望や中二病の類をここに書けというわけか。

いや、自分のそういった部分をこんな場所に書くとかおかしいだろう？！

まあ、書くけどさあ。

【Dies Irae の スルーズ ワルキューレ 戦雷の聖剣が欲しい】

書いた！書いてしまった！

これは恥ずかしい！

「失礼ですがお兄さん、このDies Irae の スルーズ ワルキューレ 戦雷の聖剣とは何かを私に説明していただけますかな？」

げっ？！

なんでそんな恥ずかしいことを・・・ええい、既に書いてしまった後なのだ、今更何を戸惑うことが！

「ええーつと、Dies Iraeっていうゲームに出てくる武器のことだよ。人の魂を使って超常的な力を振るったり、自分の願いの通りの異世界を創りだしたりすることができる・・・んだ」

あああああ、書くんじゃなかった！

これは恥ずかしい！公開処刑っていうんじゃないのかこれは！

「なるほどなるほど、では、お兄さんは人を殺したいのですか？消費するものが人の魂である以上、それは避けられぬことだと思いますが」

「そういうわけではないけど・・・もしも、もしも中世のファンタジー的な要素のある世界なら、戦争もあるだろうし、積極的とまではいなくてもそういった状況になるだろうからさ」

「ふむ、つまりお兄さんは人殺しになりたいのではなく、そう、なんとというか英雄のようなものに憧れていると、そういうわけですか？」

「んー、英雄とはちょっと違うんだけど。なんというか、騎士というか、義理深い存在に憧れてるんだよね。他者の為に身を捧げて行動するような、そんな存在にさ」

「ははあ、なるほど。それはそれは大層立派な夢ではないですか。いいことだと思いますよ、私は」

今日出会ったばかりのおじさんと中二病な会話を繰り広げてしまった。

しかも理解までされている・・・死にたい。

「では、結構な時間が経ちましたので、アンケートはそれくらいにして後は判子だけ押してもらえますか？」

判子？判子は流石に持ち歩いていないぞ。

「ああ、無ければ、この朱肉に親指を押し当てて、拇印でも結構です」

拇印でもいいのか。

まあ、おじさんがそれでいいというのであれば拇印で済ませるけど・

「これでいいかな？」

「結構でございます。それでは今から現場へをご案内しますのであちらの車に・・・」

おじさんが指し示した方を見ると確かに車がある。

これに乗ればいいっていいことなのかな？

ただどこれって、工事現場とかで使う車両なんじゃないかな？

ってことは、作業内容は工事現場での力仕事っていうわけ？

「・・・あちらの車に轢かれてください」

はっ？

と、聞き返そうとしたときには、既に車に轢かれて意識も・・・

第二話 新世界へ

「・・・あれ？俺はさっき車に轢かれたような」

ようなではなく、確かに轢かれたはずだ。

大学からの帰宅途中に変なおじさんに話しかけられて

アルバイトの勧誘をされて、そして轢かれた。

「いや、確かに轢かれて死んだような気がするんだけど・・・って！
ここはどこだよ！」

車に轢かれて死んでいるなら意識はないはず？

まあ、これは推測だけさ、死んだことがないから。

生きているのなら、治療の為に病院にいるはずだろ？

まあ、もしかしたら数ヶ月意識を失っていたのなら

それはそれで家なり病院なりのベットで寝ているはず。

だけど

「荒野だな。紛うこと無き荒野だ。はっ？！なんだこれは、どうい
うことだ！」

おいおい、これはどういうことだ。

目覚めたら荒野とか、現実的に有り得ん話だろ。

「って、待てよ。もしこれが死んだ後の天国とかなら・・・」

と、呟いてそれはないなと理解した。

大学帰りの服装に、べつとりと血のあとが付いている。

つまりは、おじさんと出会ったことも、車に轢かれたことも事実。

そして気が付けば荒野にいますという現実だけが残される。

「はあ・・・こんなことになるならおじさんの話を聞かなければ良かった」

まったくもってその通りだが、時既に遅く、後悔先に立たず。

「とりあえず、俺は俺のせいで荒野にいますというわけか。で、どうしようか。ずっとここにいても餓死するだけだろうし・・・とりあえず、今何を持っているかの確認だな」

鞆の中には・・・何も入っていない。

いや、入っていないこともないが、空のクリアファイルが一つあるだけで他には何も無い。

「そつえば、態々休日なのにレポートを出しに着たんだよな。何も入っているわけ無いか」

鞆を逆さにして振っても何も出てくるものは・・・あった。

「ん、なんだこれは。こんなもんを入れた記憶なんてないが・・・説明書？」

何も入っていないはずの鞆の中から、見るからに怪しい説明書と書かれたものが出てきた。

「説明書、説明書ねえ。なんの説明書だ？」

怪しいことは承知の上で、とりあえず開いて見る。

「倉屋敷直衛様専用説明書？えーっと、目次は・・・貴方の置かれた状況、この世界について、チュートリアル・・・おい！10ページしか中身がないぞ！後は全部余白かよ！」

説明書には自分の名前が書かれていた。

目次の内容は、今の境遇を説明してくれるものなのだろうか

少なくとも、必要不可欠な内容が記されているに違いない。

少しでも情報を得る為に読み進める以外に無いか。

「なにに・・・直衛様へ、本契約書への拇印、誠にありがとうございます。さつそくですが、貴方様の置かれた状況について説明させていただきます」

「貴方様は弊社との契約に基づき今その場にいます。具体的には、

貴方様が自身が説明してくださったように、ファンタジー溢れる世界にて騎士の如き活躍ができる舞台を用意させていただきました」

「貴方様との間に交わされた契約は、貴方様の願いを叶えるというものであり、弊社はそれを積極的にそして否応なしに叶えています。故に貴方様は現在、荒野にお立ちになられ、途方に暮れているものかと思えます」

「ですが、これも貴方様が真に望んでいることでありまして、弊社への苦情はお断りしています。何卒、ご理解の程、よろしくおねがいします」

「いやいやいや・・・そりゃあ確かに、そうだったらいいな。」

とか、そんなことはいったけどさ！

実際になるとは思って無かったよ！

思ってたらもつと別のことを言ってただろうし・・・

ああ、なるほど。

それも含めて真に望んでいるということか。

なら、これもまた仕方が無いのか？

うーん、とりあえず読み進めるとするか。

「さて、自身の状況についてご理解なされたと思いますので、この世界についての説明をさせていただきます。この世界は、恋姫無双

という世界を元に構成されています。ご存知でしょうか？」

「知らなかった場合の簡易的なご説明として、歴史的に有名である三国志の武将のほとんどが女性に置き換わった世界であります。これもまた、貴方様のご希望通り、クリスマスに独り身は寂しいという願いを考慮して創らさせていただきました」

「当然のことですが、この世界では以前の世界のように平和などという言葉はありません。群雄割拠、戦乱の時代であるといっても過言ではなく、これもまた、貴方様の望んだ通りの世界であると思われます」

「従いまして、貴方様の願いである、騎士になりたいという願いを叶えるに相応しい世界となっていますので、御存分に夢を叶えていただきたく思います」

御丁寧にもありがとうございます・・・って言うとも思ったか！

三国志ってあの三国志だろ？

・ゲームの三国無双にもあるように、武将が雑兵を蹴散らしていく・

うわぁ、これは死んだだろ。

俺が好きなのはアクション系の三国志じゃなくてシミュレーション系の三国志なんだよね。

まあ、歴史を知っていると云うことはかなりのアドバンテージにな

るな。

だけど、なんだっけ？恋姫無双？

それについてはちょっとわからんな。

武将が女性化なんだろう？

毛むくじやらでガチムチな女とか勘弁願いたいのだが・・・

「注意事項と致しましては、貴方様の實力は前の世界の實力ではなく、貴方様がアンケートに書き込んだ實力となります。くれぐれも注意してください。統率が1なので兵を率いたとしても烏合の衆がよいところ、また政治が1なので恐らく人の名前を覚えるのにも苦勞するでしょう」

「しかし、武力が100である為に向かうところ敵なし、知力が98という値であり、そうそう罨に掛かることはないでしょう。それに加え、魅力が100となってますのでフラグの建築には暇が無いでしょう。刺されないように注意してください」

「他の注意事項としては、この世界は三国志がベースとなっている為に名前の表記が以前の世界と違います。姓、名、字、真名といった項目があり、特に真名というものは、本人が心を許した証として呼ぶことを許した名前であり、本人の許可無く真名で呼びかけることは、問答無用で斬られても文句は言えないほどの失礼に値します。くれぐれも気をつけてください」

今更だけど、武力を100にしておいてよかった。

これを何の気まぐれか武力を1にでもしておいたら賊に殺されて一貫の終わりだったはず。

はいはいと契約書に拇印を押した俺だけど、これだけはグッジョブだったなあ。

んー、それと名前か。

流石に倉屋敷を姓名字に当てはめるのは難しいだろうし、惜しいけど名は変えようかな？

三国志で何か適当な武將を・・・胡車児でいいか。

本当は典章とかのがいいんだけど、何故か典章を選んではいけないうような気がする。

だから、ここは典章の宿敵となる胡車児でいこうかなあ・・・と。

姓は胡、名は車児、字は・・・無い。

真名はそのまま直衛でいいか。

「最後に、貴方が望んだ Dies Irae の スレーズワルキューレ 戦雷の聖剣についてです。こちらの方に關しては、形成位階までの開放を行っています。創造位階以降はご自身の渴望を良くご理解された上での自己解放となっています。故に、貴方さまが御成長しなければ発動できません」

ん？となると形成は可能というわけか。

後で試して見よう。

にしても、聖遺物が使えるってことは

俺は不老不死なのか？

他に聖遺物を有している者はいないだろうし、事実上の無敵モード
というやつか。

「しかし、戦雷スルース・ワルキューレの聖剣は宝剣の類であり、王族でもない者が所持を
していると不信がられます。くれぐれも、使用に注意してください」

ですよね。

まあ、短剣でも構えて攻撃範囲を誤魔化して使うでしょう。

活動段階の聖遺物は、不可視の斬撃を放つことができるわけだし、

そういった小細工にはうってつけかな？

「それでは、準備がよろしければチュートリアルに移らせていた
だきます。説明書を地面に叩きつけると音声ガイダンスがスタート
します。ただし、一度叩きつけると二度と説明書が開けなくなる為、
十分に理解した上で行ってください」

チュートリアルしたら説明書読めなくなるとか、なんだこの不親切
な設計は。

まあいいや、現状は理解したわけだし、とっととチュートリアルを・
・

「クソツタレ！よくも願いを叶えてくれやがったな！」

と、叫んで説明書を叩き付けた。

第三話 主人公紹介と用語説明（前書き）

能力値に修正を施しました（第十一話時点）

第三話 主人公紹介と用語説明

説明書

本編より説明書の記事の方が容量が大きい。なんということでしょう。

【人物紹介】

(1) 元いた世界の名前

姓：倉屋敷くらやじき

名：直衛なおえ

(2) 恋姫無双の世界の名前

姓：胡こ

名：車児しゃじ

字：-

真名：直衛なおえ

年齢は22歳

(3) 風貌

元の世界では冴えない人物であった。

が、恋姫無双の世界では魅力100ということもあり、一級のフラグ建築士ができる存在である。

(4) 能力

武力：100 + (0) = 100

武将としての最高峰。後に説明する聖遺物も考慮すれば武神という

に相応しい。

彼が戦場で死ぬようなことはなく、死ぬとするのなら主を失ったときだけだろう。

統率： $1 + (0) = 1$

誰も彼の言葉に耳を傾けてくれない。

兵は指示を聞かず自ずから動き回り、見事なまでの烏合の衆と化す。魅力の値によつて補正を受ける。

知力： $98 + (0) = 98$

智謀に長けている。

が、実経験がなく机上論となり易い。

経験を積むことで生きてくる数値である。

政治： $1 + (40) = 41$

無知蒙昧

ただし、以前の世界での言葉は知っている。

基本的に以前の世界を基準に考えることが多く、恋姫世界の原理とすりあわないことがままある。

が、相手の政治力が高ければ十分に伝わらずとも理解される。

魅力： $100 + (0) = 100$

カリスマ、誰もが彼に目を惹かれる。

求心力は盲信を生み出し、災厄となることもある。何も考えずにフラグを積み立てれば刺されるのみ。

まとめ

【武力】：100

【統率】：1

【知力】：98

【政治】：41

【魅力】：100

ただし、能力値は年齢によって増減がおきる。

歳をとれば衰え、また若い内は能力値を上げることが容易であるが・

・

彼は不老不死である為、衰えることはなく成長するのみである。

委細は後述に示す。

(5)所持品

スルーズ
ワルキューレ
戦雷の聖剣

形態は武装具現型。位階は創造。発現は求道型。伝説通りの神話の武器ではないが、フリードリヒ3世の宝として保管されていた高い霊格の聖遺物であり、電撃を使った攻撃が可能である。

だが、主人公である直衛は一時的に制限がかけられており、位階は形成段階に留まる。

また、聖遺物である戦雷の聖剣を有している為、直衛は不老不死である。スルーズ
ワルキューレ

【聖遺物】

人の思念を吸収することにより、絶大な力を持つ様になったアイテムのこと

聖遺物を扱うためには永劫破壊と呼ばれる理論が必要である。エイヴィヒカイト
スルーズ
ワルキューレ

作中で主人公である直衛が扱う戦雷の聖剣もその一つ。

【永劫破壊】

エイヴィヒカイト

(1)永劫破壊とは

エイヴィヒカイト

聖遺物を扱うためには、永劫破壊と呼ばれる理論が必要。これは

発動に人間の魂を必要とし、使うには常に人間を殺し続けねばならない。殺せば殺すほど強くなっていき、殺した数に相当する霊的装甲を常に纏うようになる。

しかし魂にも質が存在し、単純な量だけではなく、戦士や殺すことを躊躇する相手の魂ほど質が高く、質と量の両面を兼ね備えるほど効率的に強化される。永劫破壊エイヴィヒカイトを操る者は聖遺物によってしか倒すことが出来ず、それ以外の手段での攻撃は一切通じない。聖遺物による攻撃は、物理的・霊的の両面で防がなければ防ぐことは出来ない。

また喰らった魂に相当する生命力を得ているため、仮に肉体的損傷を受けてもすぐさま再生される。聖遺物を破壊されない限り、エイヴィヒカイトの使い手は不老不死であるが、逆に聖遺物が破壊された使い手は死亡する。

作中では、直衛以外に永劫破壊エイヴィヒカイトを扱える者は居らず、故に彼が死ぬ方法は自殺以外にない。

（2）永劫破壊エイヴィヒカイトの位階

永劫破壊エイヴィヒカイトには4つの段階がある

【活動】

初期段階 限定的に聖遺物の特性を使用できる
刀剣あるいはそれに順ずるものの場合、不可視の攻撃をすることができる

身体能力はこの段階で既に遥か人外の領域

例：時速数百キロの速度で行動が可能であったり、その拳は容易に鉄柱を損壊させる。

【形成】

聖遺物を具現化できる

例：刀剣の類であれば、刀剣自体が不可視の状態から具現化される。五感や霊感が超人化し、破壊と戦闘を高次元することが可能

【創造】

切り札であり必殺技

使い手の渴望に従った都合のいい世界を創造する
大きく分けて二種類ある

【霸道型】

創造の一種 術者の周囲の空間を異界に変える、他者を食い潰して進む道

異界に取り込む人が増えることで効果が薄まるが、聖遺物使いでなければどれだけ飲み込んででも影響は無いに等しい

【求道型】

創造の一種 術者自身を異界として肉体変化や特殊能力を付与する
自分一人で突き詰めていく道であるため、他者の影響を受けない

【流出】

エイヴィヒカイト
永劫破壊の最上位階。

霸道型である場合創造の異界を永続的に全世界に流れ出させ、既存の世界法則を塗り替える。

求道型の流出は、術者自身が世界の理から外れた完全永遠の存在となる。

つまりぼっち。

エイヴィヒカイト
(3) 永劫破壊の武装形態
人器融合型

肉体を聖遺物と融合させる。攻撃力に特化し、全タイプ中最高の身体能力を発揮する。しかし聖遺物との同調率が高くなるほど極度の興奮状態となっていく、理性的に判断することが困難になる。そのため、爆発力は高い反面、格下から足をすくわれ易いタイプでもある。性格としては好戦的で破壊的な者、刹那主義者や享楽主義者などがなりやすい。聖遺物は、拷問や処刑に使用され、怨念を餌にした物が大半。

武装具現型

聖遺物を刀剣などの武器として扱う。基本形でありバランス面で優れ、特筆すべきメリットもデメリットもない。突出した点も穴もない特性上、実力以上の力は発揮できないため、未熟な者は決定力のない器用貧乏だが、強い者は万能となり隙がなくなる。主従関係がはつきりしているため暴走・自滅の危険性が低い。性格としては職業的な戦闘訓練を受けた者、現実主義者などがなりやすい。聖遺物は、武器・兵器などの戦闘における道具として使用され、血を吸った物が大半。

主人公である直衛はこのタイプ。

事象展開型

魔術や呪術のような働きをする。物理的破壊の顕現ではないため攻撃力は低く、中には攻撃力が皆無の者もいるが、反面防御や補助に優れており、殺すことが困難。融合型と組んだ場合は非常に危険。性格としては理知的で聡明な者、探究心と神経質な拘りを持つ者など、学者・芸術家タイプの者がなりやすい。聖遺物は、書物や芸術品など、作者の狂的な情熱を餌にした物が大半。

特殊発現型

上記のいずれにも属さないか、または複数の性質を持つ。他を上回る強大な力を発揮することあれば、状況次第では全く役に立たな

いこともあるなど、非常に不安定なタイプ。性格としては特定の物事や人物に囚われて盲目的になっている者、純度の高い宗教家や復讐者になりやすい。聖遺物は、質の浄不浄に関係なく、信仰を餌にした物が大半。

第四話 チュートリアル

「それではチュートリアルをスタートします。ここより北西に5里向かったところに山賊になるうかならないか迷っている方々が3名いらっしやいます。その方々を殺戮ないしは恫喝して、衣類と金品を奪ってください」

うおおおお！

さっそく凄い音声が流れ出した。

こんにちわ、死ね！も、いいところ過ぎるだろう。

「現在の胡車児様の服装はこの世界では極めて異例であり、不審がられること間違いなしです。従って、至急この世界での服装を整える必要があります」

「また、聖遺物のお陰で不老不死であることは間違いないのですが、金品が無ければ食事を取ることも、宿に泊まることも出来ません。この世界で信用を勝ち取るには金品は必須です。見ず知らずの者が無銭で現れようものなら、そのものは賊と判断されても文句は言えません」

こうやって聞くと、かなり厳しい世界だと言える。

出会った人をまず疑ってかからなければならぬというのは、以前の世界でも他称なりともあったはずだけど、即座に賊と判断されることはなかった。

だからこそ、疑われない為に金品を所持すると言つのは理解できるのだが……

「胡車児様の目標は主に仕える忠実な騎士であり、清廉潔白な英雄ではありません。躊躇することなく実施してください。略奪後、更に北西に7里向かったところに陳留と呼ばれる都市があります。そこを拠点に暫く大陸を回ると良いでしょう」

確かに、確かに俺自身が潔白である必要はない。

むしろ泥を被り、後ろめたいことを主にやるべきではないだろうか？

自身を省みずに行動するということが、騎士の在り方……というわけでもないだろうが、俺自身が望んでいるのは結局そいつたものだろうか？

ならば、悩む必要はなく、即座に決めるべきなのだが。

殺戮か恫喝

気に掛かっていることは殺すと言つこと。

平和な世界で過ごしてきた俺にとって、人を殺すということは極めて重い。

が、これも運命か。

どの道避けられぬ結果であるのなら、避けては通らず突き進むのが吉。

慣れたいとも思わないけど、慣れる必要もあるだろうから。

「こう、冷酷に考えることができるのも知力を無理に上げたせいなのかな」

「いいえ、胡車児様は優柔不断な方ではございませんでしたから・
・ですが、知力に極振りを行ったことにより、多少の影響があったことは否定できません」

「うお！会話が成立している！ただの音声ガイダンスかと思ったら以外に出来るな」

「チュートリアル終了まではある程度の会話は出来ます。他に何かお聞きになられることはありますか？」

「なら、この世界には俺のように契約によってきたものはいるのか？またそれに準じるもの」

「この世界は胡車児様の為の世界であるため、他の契約者は存在していません。ただし、この世界の構成上、外部から来たという設定である男性がそれに該当する可能性はあります」

「つまり、ゲームとかでいうところの主人公ってやつになるのか？」

「はい、北郷一刀という名の高校生がその主人公に値します。ですが、胡車児様の世界でいう一般的な高校生の性能しか持ちませんので、驚異的ではないと思われます」

なるほどねー

まあ、そういう存在もいるにはいるということか。

「北郷一刀君は悲惨だね。ただの高校生でありながら、何の力も持たずに三国志の世界に来るなんて・・・直ぐに死んでしまうのではないのか？」

「北郷一刀にも若干のハンデがあり、開始早々に死ぬことはありません。必ずどこかの勢力に拾われて生きると言う運命になっています。しかしながら、その後のことは北郷一刀次第ではありますが」

「生身で生きていられるだけ十分だと、そう思うんだけどね。んー、とりあえず聞くことはこれ以上ないから山賊になりそうな方々の場所にいこうとしようか。で、どれくらいで着くのかな？」

「恐らく、全力で向かえば1分以内かと。胡車兎様は聖遺物をお持ちですから、容易に時速数百キロで走れます上に、雷の適正をお持ちです。したがって、最終的には秒速200キロを優に超えることになります。ですからくれぐれも・・・」

「はいはい、誰かが見ている前ではそんなことはしません。というか、秒速200キロとか見えるのか？とは思っけど」

「ちなみに、チュートリアル中の行動は誰にも見られませんから御安心を。これはあくまでチュートリアルですからね」

「それはいいことを聞いた。なら、全力で向かうとするか」

「そういえば一里ってどれくらいの距離だったっけか。」

確か日本での一里が4キロくらいで・・・中国の単位はその8分の一くらい？

それであつてゐるなら400メートルくらいのはず・・・

山賊がいるのは5里先だから、2キロ先になるというわけか。

分速2キロだとしたら、時速120キロの速度で走れるというわけだが。

んー、いまいち実感がわかないな。

「悪いけど、5里をどれだけで走れるか計ってみたいんだ。時間の計測を頼めるか？」

「お任せください。それもチュートリアルの内です。全力で駆け抜けて実力をお測りになるのがよろしいかと」

「よし、なら駆け抜けてみるか」

投げ捨てた説明書を拾い上げ、北西へ駆け出す。

「うおおおお！なんて速さだ！自動車よりも早いんじゃないか！？」

俺は別に陸上選手だったわけでもない、ただの帰宅部員だったのだが・・・

この適当な走りですらこの速度、確かに一分以内に着けそうだ。

感動しているのも束の間、目の前に山賊らしき三人組みを見かけて

足を止める。

「へえ、車は急に止まれないとかいうけど、俺は急に止まれるんだな」

「むしろ止まらなかったら欠陥品だと思いますけど・・・ちなみに、5里を駆けるのに掛かった時間は30秒ですね」

となると、5里＝2キロだから、分速4キロの時速240キロか。

人間じゃないな。やっぱり聖遺物使いつて人間じゃないなあ。

「アニキ！人が！突然人が現れました！」

「てめえ、そんな訳ねえだろ。人が突然現れるなんて・・・うおお？！」

黄色い布を被った三人組みと遭遇・・・三人組みでいいんだよね？

なんかやけに小さい奴と、アニキと呼ばれている奴、後はデブ。

さてよ？黄色い布ってことは丁度黄巾党が活躍する時期か？

それは好都合、立身出世する為のいい機会だ。

俺には武力でしか評価されないだろうし抜群の時期だ。

「おい、デブ。お前はこいつがいつ来たか知ってるか？」

「・・・わがんね」

「だめだ、デブに聞いたのが間違いだったな。そこでその兄ちゃん、一体どこから現れやがった？」

「ん？ここから南東5里のところから来たただけだぞ。全力疾走で30秒ジャストってところだな」

「アニキ、こいつ頭おかしいんじゃないですか？」

「そりやそうだろう。が、言葉は通じてんだよな？なら、イカレちまった野郎なんだろう」

酷い言われようだ。

俺は事実を述べたまでであって、決してイカレちまった野郎ではないんだが。

さて、説明書はああ言ったが、こいつらは根っからの山賊に見える。

「なあ、ちよつと聞きたいんだけど・・・お前らは山賊、いや賊であつてるのか？」

「っ！馬鹿が、てめえらが周りを警戒していねえから！このトチ狂った奴に計画聞かれてんだだろうが！」

「すみませんアニキ！今までと違って大きな仕事ですから、つい浮かれて」

「なるほどなるほど、普段も小事の罪を犯してはいるが、これから根っからの賊になろうって訳か」

「なんだ、てめえそれが悪いかよ！賊にならなきゃ生きていけねー
ならなるしかねえだろうが！」

「そうだそうだ！ぽつとでのイカレ野郎が生意気いつてんじゃねえ
！」

「ああ、抗弁ありがとう。確かにその通りだろうが、それはお前らの
視点であって奪われる側の視点ではないな。とはいっても、俺も
大して変わらないことを今からするわけだが・・・な！」

エイヴィヒカイト
永劫破壊の活動位階を利用してデブに切りつける。

俺からしたら右手を振っただけなのだが、不可視の斬撃はデブを容
易く切り裂き、腹を一刀の内に輪切りに変える。

瑣末な鎧を着てはいたようだが、聖遺物の、スルーズフルキューレ戦雷の聖剣を前に物質
の堅さなど意味はない。

いや、意味はあるが、物理的な面以外にも霊的な面で防がねば防げ
ぬ行為。

この世界では誰も抗うことはできない。

のはいいのだが、些か本気でやりすぎたかな？

腕を振るっただけで、不可視の斬撃が当たっていない地面までもが
抉れ粉碎している。

んー、衝撃波つてやつか。

本来であれば生き残っているはずのチビとアニキと呼ばれる奴も木っ端微塵になっっているわけだし・・・

これは大幅な手加減が必要だな。

「お見事です胡車児様！これでご自身の実力を把握できましたね？」

「ああ、嫌と言うほどに把握できたよ。走れば時速240キロで走れるし、腕を振るえば衝撃波がでる。いやはや、やり過ぎもいいところだな」

「えーっと、衝撃波については、恐らく胡車児様が聖遺物を巧く扱えていないからで・・・力に振り回されているせいだと思います。つまり、要練習というわけですね」

「やらないといけないことばかりだな。まったく面倒極まりりといったところだ。で、この後は何をするんだ？」

「チュートリアルは山賊の討伐、つまりは以上で終了です。お疲れ様でした。後は自由に行動してください結構ですよ？」

「こっからが本編ってわけか。んーどうしようかねえ、確か北西に7里言ったところに陳留があるんだっけ？だけど、衣服とか剥げなかったんだよね・・・木っ端微塵になっちまったからなあ」

殺してから気が付いたのだが、そういえば金品を奪ったり、衣服を剥ぎ取ったりするんだった。

デブはまだ辛うじて形が残っている者の、後の二人は血溜りでしか

ない。

やれやれ、どうするべきか。

「でしたら、陳留にして仕官するのがよろしいでしょう。胡車児様の武力を持つてすれば容易に武官になれることでしょう」

「まあ、そんなところか。金が無くて信用を勝ち取れないなら、実力を見せて実用性で判断してもらうしかない。幸い、陳留には彼の人材マニアである曹操がいるだろうからな。飯にはありつけるか」

「ですが、曹操の性格からして胡車児様が一度部下になった場合、手放すとは考えられません。胡車児様は既に曹操の騎士になることを考えていらっしゃるのですか？」

「ああ、それはたぶん問題ないかな。というのも、俺は武官ではなく一兵卒として曹操の下へ行こうとしているから。最初から武官として活躍するのも、そりゃあ英雄譚としてはいいだろうけど、やっぱり兵卒から成り上がったの立身出世だろう？」

「一兵卒ですか・・・それはそれは大層な物語になりますね。どうやって推挙されたり、見出されたりされるかは兎も角、夢のある話でいいと思います」

まあ、それもあるんだが、実際にはもっと微妙な問題もある。

俺のように三国志とかのシミュレーションゲームをやったことある奴はわかるのだが、優れた能力値を持つ奴は賃金が高くなる。

だが、現状の曹操は恐らく刺史程度・・・って、あれ？この時期っ

て陳留に曹操がいたっけか？

まあ、説明書も陳留に曹操がいることに疑問を抱いてないわけだし、これは正しいんだろう。

つと、それは兎も角、現状で刺史ということは扱える資金も乏しく、これから飛躍していく時期に高い人件費が掛かるのは大きなロスとなる。

それで優れた武将を抱えることができるのであれば良いのだろうが、俺が曹操陣営に留まるかどうかはまだ分からぬ話である。

つまり、兵卒の身で曹操が如何なる人物かを見極めた方が都合がよいというわけだ。

後は、兵卒であつた方が自由の身に近いといった点。

人を殺して魂を積極的に集めたいと言つのもある。

武官のある一定の立場になつてしまえば、前線に出て戦ふことなど皆無だろうからね。

「胡車児様、お考え中のところ申し訳ありませんが、チュートリアルが終了した為に私にもお別れの時間がきました。きたのですが、一つお聞きしたいことがありますて・・・よろしいですか？」

「ん、もうそんな時間なのか。チュートリアルまでの音声ガイドンスなんて実に律儀だな」

「定時に消えるのも私の役目ですから。えーっと、それで質問なん

ですが、胡車児様はこの世界に來たことを恨んではいないのですか？やけに順応しているようで、その、不思議なんですが」

「理不尽だと、そう思ったけどさ。結局のところ、これは俺自身の願いであつたことは確かな事実だし、俺ってリアリストなんだよね。実際に別世界に着ているわけだから、前の世界の都合では動けないわけだし、ならこの世界の都合で動いていくしかないよね」

殺さなければ死ぬと言つのであれば、殺す。

奪わなければ死ぬと言つのであれば、奪う。

普通はそういった問題に対して何か葛藤があるはずんだけど、俺の場合は極めて薄い。

先の山賊に対してはある程度は悩んだが、結局は殺すことにした。

いざ実戦で躊躇しても困るわけだし、後のことを考えれば有効な判断だよな。

つと、合理的な思考をしているつもりんだけど・・・周りの状況に流されているとも言えなくもないか。

ただ、それを理解して行っているかそうでないかは大きな違いだと俺は思うけどさ。

「割り切つて行動しているということですか。感情は二次、全てを合理的に進めていく・・・実に効果的だと思いますが、それは・・・」

「人らしくない、って？ま、余裕が出来たら人の真似事だつてするさ。でもさ、今の俺はこの世界に着たばかりだし、やれることはやらないといけない。運よく聖遺物使いになれて不老不死となったわけだけど、そうでなければ人なんて簡単に死ぬんだから。嫌もない」

「なら、早く戦乱が終わり、胡車児様が人として振舞える世界になるといいですね」

「その通りだが、別に戦乱が終わらずとも人の真似事はするぞ？そうだな、人並みの暮らしを送れる様になってからだな。今はまだ、生きるのに精一杯だ」

「ふふふ、そうなるといいですね。それでは、もうお別れの時間になりましたので、これでお別れです。胡車児様の願いが叶いますこと、お祈り申し上げてこの場を去ります」

なんだか齒痒い事を言われたまま、説明書は塵となって消えた。

役目を終えたということだろうか。

「さて、これからは独り身、一人旅ってやつか。願いが叶うかどうかはわからんが、一先ずは今日の飯を求めて陳留へ向かうとするか」
時刻としてはまだ、昼くらいか？

夕暮れには城門は閉まってしまっただろうから、早めに辿り着いておきたい。

それに、兵卒として仕官しようにも、夕暮れに向かう奴はいないだ

ろっからな。

「さあーて、いっちょやってみますか」

第五話 異世界での錬金術

「ここが曹操の治めている陳留か」

・ チュートリアル後に再び全力疾走をして陳留まで来たわけだが・

存外人が少ないな。

「ま、東京や大阪、近代の日本と比べるのは間違ってる話なんだろうけど」

大門から入って直ぐの大通りは活気があるといえるが、一本裏道に入ってしまった人は疎ら。

更にもう一本進もうものなら、そこにはほとんど人はいない。

大通りが商業地区で裏道が住宅地区であれば確かにその程度かもしれないが、些か閑静過ぎる気がしないでもない。

「そういえば、この時代の徴兵方法は職業軍人ではなかったか。季節がいまいち分らんが、暑くも寒くもないということは精々秋とかその辺か？閑農期で民を兵役に課しているとか、そういった理由で閑散としているのか？」

もしそうだとすれば、一つの機会に出遅れたことになる。

黄巾の乱は相手が弱いが多いと、経験稼ぎには持って来いなん

だがなあ。

「一先ず、裏道から表通りに戻って・・・詰め所みたいな場所を探せばいいのか？閑農期なら兵卒の募集をやってもおかしくないはずだが」

と、表通りである大通りに戻ってから気が付いた。

チュートリアルで山賊から衣服を剥ぎ取るのを仕損じた為、服装が極めて浮いていること。

金品がなく衣服の購入ができないこと。

「困った困った。こういうときの対処方法ってなんだったか・・・ああ、未来から来ているんだから未来のものを売り払えばいいか。恐らく貴重品の類になるはずだ」

とはいっても、今所持しているのは鞆くらいのもの。

後は今来ている冬用のコートだが・・・これ売るしかないか。

安物のコートだが、ポリエステルと綿によって作られているコートなどこの世界には存在しないはず。

一先ずはこれ売り払って衣服を整え、更には武具も揃えるなら揃えたいところだ。

ま、精々粗悪品で身を固めるのが精一杯なのだがね。

「そうと決まれば大通りで、衣服を売っている店でも探すか。んー、

そうだな、あの店が良さそうだ」

大通りの中で一際目立つ店に狙いを定め、そこにコート売りに行くことにした。

理由は簡単、都市内で最も大きい店と言う場所は大抵が偉い人々、貴族など富裕層が利用しているはずだ。

そうであれば、この日本から持ってきたコートが極めて貴重な品となり、高価に買い取ってもらえるに違いない。

富裕層の方々に毎度毎度飽きない品を提供するということは非常に労力がかかることだろう。

そこに、明らかに異質とも言える物品が売りに出されるのだ、渡りに船とはこのことで、ましてそれが非常に珍しいものであるのなら如何様にも値段は吊り上げられるはず。

「主人はいるかな？買い取ってもらいたいものがあるのだが」

店内に入り内部を見渡す。

・・・げっ、なんだあれは。

いや、まてよ？なんでこの時代にブラジャーなんてものがあるんだ。んー？んー、でも、原始的なものは古くからあつたらしいからいいのか？

ただ歴史書に残っていないだけかもしれないからなあ・・・都合が

悪くて消されただけかもしれない。

細かいことはいいか、現にここにブラジャーが売っている、それだけの事実で十分。

「ようこそいらっしやいました。私がこの店の主であります。買取をご希望のことで、お品の方はそちらの手持ちの品でよろしいですか？」

「このコートを頼む。ああ、一部の支払いを現物払いにして欲しい。そうだな・・・身動きのとりやすい軽装であるという条件を満たしていれば他は特に問わない。3着ほど用意してもらいたいな」

「それは構いませんが・・・この衣服は実に肌触りが良いですな。どうにも見たことの無い素材で出来ているようですね」

「珍しいだろう？この大陸を越え、遙か羅馬からの伝来品だ。二度と手に入らぬ一品といっても過言ではないと私は思うが・・・ま、私は買い取り価格に口を挟むつもりはない、好きにしてくれ」

「なんと！それはそれは大層貴重なものを・・・大いに勉強させていただきます」

主人はそういうが、実に打算的に目を光らせてコートを検分している。

客の言うことを容易に信じるわけでもなく、あくまで参考程度にそれが信用できるか値踏みしているところか？

当然といえば当然だが、声高々に珍品であると言い、また価格につ

いても主人に任せるといったのだ、安値にはできんだろう。

現に衣服としては最高峰の素材であることもさながら、買取価格も主人に任せるといったのだ、ましてやここは富裕層との取引を主にするだろう商店であることから、下手な値段をつけてしまえば評判に関わる。

精々足元をみるとしても、一部が物品交換であるからそこを突くしがあるまい。

「お待たせいたしました。この衣服の価格ですが・・・この価格にて買い取らせていただきたく思いますが、どうでしょうか？」

多いのか少ないのかよくわからん。

が、先に表通りを歩いていたとき、ある程度の物品の価格は見ていた。

察するに、半月ほどは宿を借りたとしても優に暮らせるか。

元々富裕層向けの場所で、物品交換を希望したのだから多少は金が掛かるとはいえ、些か少ない気もするが・・・

「構わんよ。いい値で構わん。私は主人に任せるといったのだ、私よりも詳しい主人が決めた値段なら間違いなどあるはずもない」

一度口にした言葉を撤回することはできん。

ま、半月の間に兵卒になれば良いだろう。

「ありがたいお言葉で・・・失礼を承知でお聞きますが、旦那様は旅のお方ではないですか？」

「まさにその通りだが、それがどうかしたかね？」

「いえいえ、滅相もございません。ただ、私どもはある程度この街で顔が利きますゆえに、よろしければ今晚の宿をご紹介させていただきます」と思った限りでございます」

「ふむ、それはありがたい話だ。何分、ここに来て間もなくでな、それほど詳しいわけではないのだ。それに主人が進める場所であれば外れを引くようなこともないだろう」

「それでは手配させていただきます。ああ、もちろん宿の代金は私にお任せください。此度の商品を譲っていただいたせめてものお礼でございます」

「感謝する。ということは、私が希望した衣類についてもそこに届けられると判断して構わんかな？」

「はい、ここで採寸を終えた後、宿の方へお届けさせていただきます」

「わかった。では主人に任せる」

俺が快諾すると主人は即座に人を呼び寄せた。

大方宿への案内人なのだろうが、実に無愛想である。

「お前は採寸が終わり次第、旦那様をいつもの宿にお連れしろ。く

れぐれも粗相のないようにな」

「お待たせしました旦那様、宿へはこの者がお連れしますゆえ、――まずは採寸の方をよろしいですか？」

「ああ、構わんよ。主人も暇ではないだろう、やることはさつさとやってしまったほうがいい」

奥へと通されて、速やかに採寸を行う。

手際のいいことだ、こう、手間取らないのをみていると気分がいい。採寸の最中、主人が俺の衣服に興味を示していたのが若干疎ましくはあったが……

どうやら、俺の着ている服は下着ですら主人の気を惹くものらしい。やれやれ、商人というものはこれだから……いや、注意深く見ていられるからこと商人として成り立つのか。

「旦那様、採寸は終了いたしました。後は宿にてお待ちいただければお届けに参りますゆえに……」

「ああ、わかった。彼に案内してもらえばよいのだろうか？主人の邪魔をしても悪いだろう、私は先に失礼させてもらうよ」

用を済ませたらさつさとその場を去る。

俺には武具の購入や書籍の購入など、まだまだやらなければならぬことがあるからな。

それに、こう堅苦しい言葉使いも面倒ではあることだ、早くここを去りたい。

主人は俺が見えなくなるまで門前で見送ってくれたが、俺としてはそれよりも早く衣服を仕上げてもらいたい。

そう思うのは俺がせっかち過ぎるということだろうか。

と、またしても考え込みながら歩いていたら目的地に到着したらしい。

気が付けば俺は部屋に通されていて、案内役の男も既に姿を消していた。

「嫌な予感がするけど、もしかして話半分に適当に返事とかしてたんじゃないだろうか」

俺の悪い癖なのだが、何かに熱中すると他のことが目に入らなくなる。

それに加え、考えながら別の作業をするということも苦手なんだよね。

今回はそれが両方とも発動して、気が付けば宿屋つてことに。

「そんな俺が兵の統率を行えるわけがな・・・って、もしかして統率を1に設定したからさらに悪化してるんじゃないか？」

「胡車児様、どうか致しましたか？」

「っ！いや、なんでもない。気にしないでくれ。・・・ところで、この付近で短剣の類の武器売っている店を知らないかな？旅の途中で喪失してしまつてね、代わりを探しているんだ」

「短剣ですか。それでしたら、胡車児様が買いに向かうよりも私が買いに向かった方が良品が手に入りますね。市販で売られている短剣は粗悪品が多く、信頼性のある品をお探しならある程度の伝手をお持ちでない方は・・・」

「なら、手間かもしれないが頼んでもいいかな？護身用にも使える短剣、短刀の類を2本、可能なら箆手や鎖帷子の類も欲しいのだが・・・予算はこれくらいで足りるかな？」

コート売った代金のうち、その半分を差し出す。

「そうですね・・・箆手や鎖帷子の類は入手可能でしょう。ですが、短剣の類に関しては並程度の品質になつてしまつかもしれませんね」

「では、もう半分出せば十分か？要求されるのは第一に強度、第二に切れ味で頼む」

「これだけあれば購入できるでしょう。では、使いの者を出しておきます」

ふう、これで大抵の品が揃つたかな？

この世界での衣服も後に宿に届き、鎖帷子や箆手、武器となる短剣も手配できた。

本来であれば、旅するのに背囊などは必要不可欠なんだろうけど、時速240キロで走れる以上は必要あるまい。

明日にでも詰め所にでもいけばいいのかな？

それで無事に兵卒になれば、いいのだが。

「すまないが、暫く休ませてもらう。食事のときまでは起こさないでいてくれ。衣服やその類が届いたときは後で渡してもらえれば構わないから」

「承知しました。では、ごゆっくりお休みください」

ま、聖遺物使いが疲れたりとか、そういったことはないのだが

肉体的には疲れていなくても、精神的には大いに疲れる。

なんといつてもまだこの世界に来て1日目なのだ。

流れるようにここまで来たが、実は心臓はバクバクであり余裕は無い。

ここはさっさと寝て、落ち着くに限る。

明日は待ちに待った、騎士への第一歩を踏み出す日なのだ

体調は万全で望みたいだろう？

第六話 採用試験（前書き）

誤字修正を行いました。（12/20）

第六話 採用試験

「寝すぎたなあ、体がダルイ。んー料理も口に合わなかったせいもあるだろうけど、これはあまりよろしくないな」

昨日は結局、食事の時間までずっと眠ったまま、勿論食事を取って直ぐにまた眠った。

夕食は、恐らく豪華であるものだろうが、如何せん味が薄かった。

日本という国で多種多様な味に慣れていた俺にとってあの薄味は厳しい。

まあ、海が近くにあるわけではないから塩がふんだんに使えないのだろう、こればかりは仕方ないといえばその通りなのだが。

「不満と文句は尽きることがないってのが、いつの世にも言えることなんだよね。満ち足を知らず、って非常に贅沢なことだとはわかってるのだけだ」

今は、陳留にある詰め所に向かっている。

根拠は特に無いが、恐らくここに向かえば兵卒になれるだろうと俺の感が告げているからな。

外装に、見繕ってもらった軽装の衣服を羽織り、中には鎖帷子を身に付ける。

街中で実に過剰防衛ともいえる装備なんだろうが、つけておくに越したことは無いだろう。

実際には鎖帷子などなくとも、傷一つ付けられることもないのだが、何も装備せずに傷を受けぬなどと、怪しいことこの上ない。

ま、そういったわけでとりあえず装備している。

今着ているのも、慣れるためだな。

いざというときに違和感を感じていては戦闘に集中できない、つくづく自身の欠点だと俺は思うよ。

短剣は腰につけている。

これもまた実際には聖遺物があるのだから必要はないのだが、不可視の斬撃というものは現実的に考えて有り得ない。

つまりはカモフラージュというわけで短剣を持っている。

2つ持っているのは二刀流に憧れていたから。

騎士といえば大剣なのだろうが、双剣も俺は悪くないと思う。

暗殺者みたいだと言われればそれまでだけだな。

「つと、ここが詰め所か。流石に早朝だけはある、眠たげだが兵の姿もちらほら見えるわけだが・・・そろそろ早朝訓練の時間か？」

「む、なんだ貴様は。一体何を言っている」

ぐあ、心の声が漏れていた！

まだだ、これくらいの声ならまだ大丈夫だろう。

ただ単に感想を述べただけに過ぎないわけだから、そうこれくらいはセーフ、セーフのはずだ。

「私は、姓は胡、名は車児と申す者。御高名な陳留刺史である曹孟徳様の下で働きたく、志願しに参った」

「なんだ兄ちゃん、見たところ旅人のようだが・・・ここに定住でもするつもりか？」

「見聞を広める為、各地を巡り回っているのだ。曹孟徳殿が噂通りの御高名な方であればそれもあり、そうでなければここを去るだけだ」

「てことは、傭兵の扱いだな。体格は十分、歳も問題ないだろう。で、お前さんは腕に自身があるのか？」

「腕には自信がある。誰にも引けを取るつもりはない」

「ハハハ、そんな短剣で言われてもな。まあ、いいだろう。えーつと、胡車児だったか？お前が傭兵になるのに相違なければ、この紙を持って向かって左の扉に入れ。そうすれば、後はトントン拍子で話が進むだろうよ」

言われるがままに紙を受け取り左の扉に向かう。

用紙には、流し読み程度だが雇用契約に関するないようだと理解した。

契約金と出来高払い・・・ふむ、これはこれで中々うまい仕事ではないのか。

それだけ危険で死に安い仕事に回されるということでもあるだろうが。

「む、まさか早朝からこちらに来る者がいるとはな」

そこには青髪の女がいた。

受付業務でもしているのだろうか？

その割には、妙に威圧感があるというか、手練であるように感じる。

「どうした、右の扉ではなく左の扉に来たのだ。相当の手練なのだろう？名はなんというのだ」

なるほど、右と左である程度の篩い分けをしているということか。

左ではなく右であったのなら、恐らく一兵卒。

こっちはちょっと飛び級といったところか。

「私は、姓は胡、名は車児と申す者。御高名な陳留刺史である曹孟徳様の下で働きたく、志願しに参った」

「御高名とな・・・生憎、華琳様はこの地にて刺史を為されている方だが立場は先に言った通り、刺史だぞ？それなのに御高名とは、一体どこで知ったのだ」

「私は私が見えるべき主君を探して見聞を広めつつ旅をしている。その旅先で曹孟徳様の噂を聞き、この陳留に来た」

「なるほど、旅の途中でか。では、胡車児にとって陳留はどのように映る。噂どおりの人物が治める街であると思うか？」

「十二分に。治安よく、活気溢れている街ではありませんか。ですが、それだけでは曹孟徳様本人を知ることにはなりません。故、曹孟徳様の下で働き、見極めようと思った次第」

「そうか。なら、華琳様の素晴らしさを存分に味わうがいい。華琳様こそ、天下を制するに値する霸王だと、そう私は思っているからな。とはいえ、胡車児の実力を知らぬうちには、出来ぬ話であるが」

「採用に際して試験を課す、ということですか？」

「その通り、幸い今は調練の最中で、姉者もいる。胡車児、腕には自信があるのだな？」

「ああ、誰にも引けを取るつもりはない程には」

「それは重畳、ならばその腕を見せてもらおう。私の後をついてきてくれ・・・そういえば名を伝えるのを忘れていた。私は、姓は夏侯、名は淵、字は妙才だ」

行き成りのビクネームに目玉が飛び出しそうになった。

確かに、確かに三国志の武将が女性になっているとは聞いていたが・
・俺はクマのような大女かと思っていたよ。

っと、夏侯淵に置いていかれぬように付いて行く。

先ほど姉者とかいっていたから、恐らく夏侯惇も同じく女性なのだろう。

そして課せられた相手は夏侯惇であり、彼女と試合をして俺自身の腕を披露せねばならないと。

やれやれ、最初から実に大物を引いたものだ。

だが、ここで夏侯惇の実力が知れば後は大体知れたようなもの。

ただ、手加減をしなければならぬというのは実に面倒なことでもあるがね。

「姉者、調練のところ悪いが華琳様への仕官者が現れた。武官志望で腕には自信があるらしい。ここは一つ、実力を測ってくれないか」

夏侯淵に付いて行くこと数分、ここは既に兵の練兵場。

今話しかけた女性が恐らく夏侯惇で間違いないだろう。

この頃はまだ眼帯はしていない、ということはやはり今の時期は黄巾の乱前後なのだろう。

眼帯をしていれば少なくとも反董卓連合の時期を過ぎているだろう

し、眼帯をしていない場合だとしても、兵に忙しさがなく、反董卓連合には至っていないはずだ。

となれば初陣は黄巾党の討伐任務になるのかな？

まあ、それも夏侯惇との試合を終えた後、見事仕官できてからと言う話なのだろうが。

「秋蘭がそういうのなら・・・だが、仕官するのはその男か？」

「私は、姓は胡、名は車児と申す者。御高名な陳留刺史である曹孟徳様の下で働きたく、志願しに参った。私の実力を披露する相手が夏侯元讓様であるのなら、これ以上の喜びはない」

「ほほう、華琳様だけでなく、私のことも知っているのか。私はそれほど有名になった覚えはないが・・・まあいい、胡車児といったな？先手はくれてやる、」

なんか思った以上に好戦的というか猪突猛進な感じだな。

それに比べて夏侯淵は落ち着いている。

ふむ、史実だと逆のような気がしたが気のせいかな？

「先手、ありがたく頂戴します」

答えると同時に夏侯惇へ向かって駆け出す。

速度は手加減に手加減を加えて一般人より少しは早い程度。

達人からすれば造作もなく避けられる速度であり、当然カウンターを貰うことは確実、さて、どう返す。

「なんだ、腕に自信があるといった割りにこの程度か？確かに民と比べれば早いかもしれんが、それでは兵卒以下の速度だ」

接近して右手に構えた短剣で切りつけたが悠々と防がれる。

よくもまあ、あんな大剣を振り回せるものだ。

今回の試合だが、もちろん聖遺物は使っていない。

あくまで腕を披露するだけであり、彼女を殺すわけではないのだから当然のことだ。

・・・それもあるけど、兵に囲まれた中でやるのは少々拙い。

合戦時には奥の手となりうる不可視の斬撃は、なるべく知られたくない技だからな。

聖遺物使いとして全力全開で戦に赴くのもそれはそれで良いのだが、出切れば使いたくはない。

緊急時は別として、それ以外に用いようものなら容易にこの世界の戦の定義を壊してしまう。

俺だけで勝敗が決まるなどと、そんな戦争に何の意味があるんだろうか。

「どうした、考え事か？ま、自信満々に切りつけた結果、悠々と防

がれたのだから分からなくもないが・・・それでは戦場では死ぬだけだぞ」

「ご冗談を。これはあくまで試し撃ち、手加減に手加減を重ねた結果です。そうですね・・・本気というのはこういう一撃を言うのですよ！」

右手で夏侯惇の大剣を受けつつ、左手の短剣で切りつける。

先ほどの一撃とは違い、多少はマシな攻撃・・・恐らく一般的な手練の手腕くらいだと思う。

いや、手練の一撃を見たことがないから推測なんだけどさ。

「ほう、今のはなかなかやるではないか」

だが、それもまた容易に避けられる。

「余裕そうな発言だけど、顔に余裕がなくなってるよ。次も防げるのかな？」

「ぬかせ！私が貴様などに遅れをとるはずがない！」

「なら、今度は俺が受けよう。さ、夏侯元讓様、思う存分にかかってこられるがいい！」

「言われなくとも！」

先の攻撃で、手加減の目安は立った。

夏侯惇を焦らせるとまでは行かずとも、余裕をなくす程度も力を出せば十分だろう。

と、攻撃に関しては把握したから、今度は相手の攻撃を受け流す練習をしようかと思ったのだが・・・

意外に、というか予想通りに猪武者だな。

猪突猛進の猛者とは。ふむ、相手にしたくない部類ではないかな？

「はああああ！」

「そんな大振りで俺が捕らえられるとでも？」

夏侯惇が振るう大剣が俺を捕らえようと縦横無尽に襲い掛かる。

避けれるものは避け、一般的に避けるのが間に合わないと思われる攻撃は弾く。

うーん、強い。いや、強いんだろうけど。

時速240キロでの高速戦闘が可能な俺からすると兎戯に等しい。

欠伸が出ちゃうかもしれないな。

「ぐううう・・・胡車児！避けるんじゃない！」

「冗談でしょう？わざわざ俺が止まらずとも、夏侯元讓様なら容易に当てられると思っているのですが・・・」

「言ってくれるな！くっ、貴様のような奴が在野に埋もれているな
どと！」

おお！なんか評価が高いらしい。

ま、夏侯惇も自身の武に誇りをもっているだろうし、わからなくもないけどね。

・・・それはいいんだけど、さっきから俺、元の口癖に戻って俺とかいってないか？

これ大丈夫かな？不敬罪で云々とか、そんなことにはならないよね？

上下関係って大変だ。

「夏侯元議様、息が上がっておいですが・・・そろそろ準備運動は終わりではないですか？そろそろ夏侯元議様の実力を拝見させていただきますたいのですが」

「はっ！よくわかってるな！そろそろ私の実力を見せてやろうとだめだ、姉者」

更に煽ってみたが、即座に夏侯淵からの横槍が入る。

んー、思惑としては一般兵の前だからやめておこうというところかな？

夏侯惇は曹操陣営の武の象徴ともいえるし、彼女が突然現れた武将に打ち負かされるのは好ましくないだろう。

「姉者には兵の調練があるだろう。それに胡車児の実力は十分計れた」

「秋蘭！だがまだ勝負はついていない！」

「ああ、だから勝負は調練が終わった後にでもすればいいだろう。今は、華琳様が下さった調練の任務を遂行するべきだ」

「ぐっ……確かに。華琳様の任務をやらぬわけにはいかない。胡車児！調練が終わったら決着をつけるぞ！」

「胡車児もそれでいいか？」

「私の実力をご理解していただけたのであれば、私としては異論などあろうはずもございません」

「では再び私についてきてもらおうか。胡車児殿は現状では客将という扱いになるうが……これも華琳様の承諾を得てからだ。これから華琳様に謁見することになるが、構わんだろう？」

トントン拍子で話しが進んでいくなあ、本当。

元々は兵卒からのスタートをするはずだったのに客将スタートとは。

ま、これも正式に任官するのであれば武官になるだけで、今は見極めるみたいなのを夏侯淵に言っただからこそその客将扱いだろう。

一気に高給取りか……お金の使い方を覚えないと。

どうにも武具や衣類の話は出来たものの、金銭感覚がないというか。

これ硬貨にどれだけの価値があるのかがさっぱりわからない。

政治が1つてのはこういったところに反映されるってことか。

これから先が実に不安になることである。

「で、どうなのだ。なにやら考えているようだが」

「ああ、すまない。考え込むと周りが見えなくなるのは俺・・・私の癖だね。曹孟徳様に会うという話だが、是非会わせていただきたい」

「ふ、その”俺”というのが本来の口癖か？私達の前では構わないが、くれぐれも華琳様の前では慎むように」

これから曹操への謁見か。

行き成りラスボスクラスとの邂逅とか、運がいいのか悪いのか。

だが、曹操に会えると言うのであれば会うべきだろう。

三国志において極めて明確な覇を打ち出そうとした、曹孟徳。

果たして、どんな人物なんだろうか。

夏侯淵と夏侯惇が綺麗どころだったわけだし、曹操も同じくそんなのだろうか。

いや、まてよ、曹操は美人を囲うのが好きだったはずだからもしか

したら男の可能性も・・・

まあ、会ってみれば分かることか。

男であれ女であれ、仕えるべき人物であれば主となっていたただけのことだからな。

そんなことは瑣末な問題、そう瑣末な問題なのだ。

第七話 最終、役員面接（前書き）

修正しました（12/21）

第七話 最終、役員面接

「華琳様、武官として華琳様にお仕えしたいという者を連れてまいりました」

「そう。入りなさい」

ついに曹操への謁見か。

よくよく考えれば一連の行動は日本でいうところの就職活動と同じなんだろうけど・・・よくもまあ、スムーズに行ったものだ。

日本でもこれくらいスムーズに就職活動が出来ていれば、この世界に来ることもなかったんだろうに。

重々しい扉を押しあけて、ある種、王者が為にでも作られた玉座を見やる。

玉座の間には親衛隊とも取れる武装集団が整列しており・・・なんだこれは圧迫面接か？

いや、まあ、護衛役だというのもわかっているのだが、それにしても数が多いだろう。

形式と言えばそれまでだが、そうでなければ恐怖を与えかねない。

つまりは、それだけ俺が信用されていないということの裏付けとなるのだが。

「この者が華琳様にお仕えしたいというものです。武官としては姉者……春蘭に引けを取らないほどの実力を持っております。文官としての適性は未だ測っておりませんが、口が良く回ることです、それなりの活躍はするかと思われます」

「ご紹介に与りました、私は、姓は胡、名は車児と申す者であります。御高名な陳留刺史である曹孟徳様の下で働きたく、志願しに参りました。どうかよろしければ、私めを末席へと加えさせていただきますことを何卒よろしくお願い申し上げます」

「既に知っているとは思いますが、私は、姓は曹、名は操、字は孟徳。胡車児、貴方のことだけど、春蘭にも引けを取らないほどの武官と秋蘭は称したけど、それ以外に貴方が得意とすることはないのかしら？」

これは俗に言う、何か特技はありますか？とか何か資格はありますか？

といった類の質問ではないだろうか？

んー、返答しにくい質問だな。

俺は実際問題、武力以外では出世できなさそうである。

他に得意なことと言われても、統率はパーだろ？

知力はほぼ頂点に立つと思われるが、それを伝える政治がパー。

語彙が貧弱だから、外交官として立ち回ることできないだろう。

当然物覚えも良くないのだから、内政官も不可能。

日常会話くらいの、日本でも身に着けた程度の会話であるなら、多少は融通が利くけれど他は多分無理だろう。

となれば、俺に残されているのは武力と、そして聖遺物使いとしての力だけだ。

運用方法としては、斥候かな？

魅力を100にしてみました結果、妙に人の目を集めることとなつてしまった気がするが、持ち前の俊足を生かして斥候を行うのがベストだろう。

「誠に申し訳ないことですが、私は武力以外に優れたところを持ちません。兵の統率を取ろうにも、意思の疎通に手間取ると思われ、また文官を担おうとしたところで、これもまた疎通を取ることは難しいでしょう」

「そう。それでも構わないわ。武に関して一芸に秀でるだけでも現状は十分でしょう。貴方に向上心があれば、意思疎通等という問題は瞬く間に氷解する。違うかしら？」

「誠にその通りでございます。曹孟徳様のご厚情、感謝にたえません」

「これで意思疎通が取れないというのは謙遜し過ぎだと私は思うのだけだね。まあいいわ、胡車児、貴方を今日から客将扱いとするわ。それでいいのでしょうか？貴方は随分と遜っていたけれど、実際私を見極めているのではないかしら？」

「恐れ多いことですが、その通りでございます。私自身各国を回り私が真に仕えるべき主君を探している最中にございます」

「なら、貴方のその行脚はここで終わるわ。貴方はこの曹孟徳に仕えることになる」

なるほど、確かにそうなりそうな気がしてくる。

なんというか、こう惹かれるとでもいえるのか？

これがカリスマだとかいわれる素質とでもいえるのか。

悪い気はしないな。

「陳留での治世を拝見させていただき、曹孟徳様は誠、天下の英傑になれる方だとは存じておりますが、それだけでは未だ足りぬと私は感じております」

「容易に首を縦に振らないのね。ふふふ、気に入ったわ。胡車児、貴方は武官として明日の討伐軍に参加しなさい。兵の指揮に自信がなければ、私の指揮から学べることもあるはずよ。それに、秋蘭が認める貴方の腕をこの目でも見てみたいわ」

「承知いたしました。この胡車児、粉骨碎身の覚悟で務めさせていただきますましう」

ということはかなり忙しい時期に邪魔をしてしまったということか。調練場にて将官が直々に調練を付けているのもそのせい、明日の討

伐軍の最終調整といったところだったのか。

恐らく対戦相手は黄巾党、黄巾の乱が始まる前なのか後なのかはわからんが、前者であるなら規模は小さく、後者であれば規模は大きくなるだろう。

それを陳留刺史でしかない曹操が行うというのは・・・武勲を立てる為か。

「さて、では胡車児の件はこれでいいわね。皆、下がっていいわ」

やはり、親衛隊を配置したのは俺へ対処だったようだ。

これがまた、他国の武官であつたとか著名な人物であれば話は別なのだろうが、俺は今回アポイント無しで突然現れた無骨者だからな致し方ないことではある。

「胡車児、後は好きにしてもらって構わないわ。部屋で休息を取りたいのであれば、貴方の部屋へと案内をさせる。明日の討伐軍への参加で色々準備もあるだろうから、また詳しいことは後で話しましょう」

額面通り言葉を受け取れば実に俺の為を思っているのだが、どうにも用は済んだので下がちなさいという意味合いの言葉ではないかと勘繰ってしまう。

強ち間違いでもないのだろうが、これも俺の悪い癖だなあ。

もったいなく、なんというか、夏侯惇のようになれたら楽なんだろうが。

「それでは失礼させていただきます。本日は、曹孟徳様に謁見できたこと、誠に感謝にたえません。この礼は、必ずや明日の討伐戦にて報いらさせていただきます」

「期待しているわ。討伐に關しての委細は後で夏侯淵に聞きなさい。二人とも、下がっていいわ」

夏侯淵と共に玉座の間から去る。

曹操は夏侯淵から討伐戦のことを聞けといていたな。

「夏侯妙才様、明日の討伐戦のことだが・・・」

「夏侯淵で良い。姉者に対しても同様に夏侯惇と呼べばいいだろう。これから共に肩を並べて戦うのだ、それでは些か他人行儀過ぎるというものだ」

「そうか。なら、夏侯淵。再び聞くが、明日の討伐戦とはどこで誰と戦うのだ？」

「隣街で賊が蔓延っている。黄巾を纏っているので、便宜上、黄巾党と私達は呼んでいるが、その討伐だな。華琳様は陳留刺史という立場でいらつしやるのだが、元々この地を治めていた州牧殿が黄巾党に怯えて逃げ出してしまっただけ」

「なるほど、隣街といえども何れ曹孟徳様が統治する地域に違いはない。後の為にもここで賊を討伐しておいた方が色々好都合ではあるな。何より、名が売れるというのは得難いものだ」

となれば、ここの討伐戦においての勝利は当然

また、なるべく寡兵で且つ被害の少ない勝利を齎せば曹操軍の威光は高まるな。

俺に出来ることと言えば、最前線に立ち兵の指揮を無理やりあげる
こと。

それと、被害を俺が引き受けることか。

「打算的なものだけではないがな。華琳様は民草に対して慈悲深いかただ、己の治めぬ領地だとはいえ、賊が蔓延っているのが我慢ならないのだろっ」

「なるほどな。夏侯淵が信奉しているのもわかる気がするよ。悪いが、俺は明日の支度をしようと思う。夏侯淵も忙しいだろうから・
・俺が使うことになる部屋だけ案内してもらえるか？」

「ああ、お安い御用だ。胡車児が使う部屋は・・・こっちだな」

さて、明日は自身の望んだ武勲を立てるべき機会、賊の討伐戦だ。

烏合の衆を蹴散らすに相違ないことだろうが、油断は禁物

少なくとも、俺は不老不死の恩恵を得ているゆえに、ドジを踏んでも問題は無いが他の者は違う。

行軍が巧くいくように、事前偵察でもこなしておくか。

隣街といってもそれほど遠いわけではあるまい。

ま、山を越え、谷を越えとなっても、造作もないことだろうけど。

一つここで活躍でもして、真名を授かるほどには信頼を勝ち取りたいものだ。

というより、いちいち敬った言い方をするのが面倒なんだよな。

何より、こういう堅苦しいのは苦手だ。

騎士を目指しているのに苦手とは思議に思つかもされないが、それはそれ、これはこれ。

別に主君と従者の関係などいくらでもあるだろう？

その中に非常に近い関係があっても構いはしない。

そうだろう？

第八話 先行偵察

「っと、ここが夏侯淵が言っていた隣街・・・でいいんだよね？」

おかしいな、賊が蔓延っているといっていたはずなのに・・・

「んー、向かう先を間違えたか？これってどう見ても廃墟だよな」

夏侯淵から明日救助に向かう隣街の場所を聞いて疾走してきたはいものの、そこは既に廃墟となっていた。

街と呼ばれていたであろうものは既に大半が焼け落ち、とても人が住めるような環境とは言えない。

陳留から距離にして大よそ100里ほど・・・キロに換算すれば40キロくらいか。

直線距離であればこれよりも短いのだろうが、あいにく山を越えていることから距離が伸びている。

これを討伐軍として移動するとどれくらいかかるだろうか？

軍の編成にもよるだろうが、どの道輜重隊の行軍速度は遅く、戦備行軍のように周囲を警戒しつつ移動すれば更に速度は落ちるだろう。

それに加え、整備されているはずもない山道を通るわけであるから、非常に時間がかかる。

もっとも、輜重隊では山を越えられぬ可能性は十分にあることから

山をある程度迂回した街道ルートで討伐に赴くはずだろうが・・・
一日二日では到底辿り着けないだろう。

となれば、騎兵を戦備行軍で先行させつつ、主力を含む輜重隊列はその情報を元に行軍速度を決める。

こんなところだろうか？

俺には軍の運用術などわかるはずもなく、あくまで推測でしかないが、兵の疲労、炊事を考えたらもっと遅くなるのかもしれない。

近代的な装備を整えていれば、水等の物資も潤沢に、且つ、大規模に輸送できることから行軍速度は早まるとは思うのだが・・・

ま、それを俺が考えても仕方のないことが。

恐らく、今回の討伐軍は総大将に曹操本人が赴き賊を討伐するはずだ。

それが最も名声を高めやすく、合理的であるからに違いないからな。

「軍に関しては、専門家である彼女らに任せればいいとして・・・
討伐する相手がいないというのは、困った話だな」

街一つを焼き払えるほどの人員がいるのだから、どこかに根城を構えているはず。

無ければこの街を焼き払わずとも、占拠して好き放題に筆り取った方が賊としては良いわけで・・・

それをせずに略奪をして根城に引き返す、更に生存者を残さぬように皆殺しにしたのであれば、賊軍だとはいえども間違いない指揮官がいるはずだ。

「寡兵にて敵を打ち破る、相手は所詮賊である。んー、過信が下で足を掬われそんな気がするな」

見事罠に嵌るだけの御膳立てが揃い過ぎだな。

これは、そう、なんというか、調子に乗って突撃した誰かが奇襲を受けて窮地に陥るような。

そんな気がする。

曹操軍がそんな罠に嵌るとは思えないが、勝って兜の緒を締めよってという言葉もあるくらいだ、慎重に慎重を重ねても問題はないな。

「この場にいるのが俺ではなくて、魏を代表するような軍師・・・荀？とか郭嘉が居ればうまく表現できるのだろうが、これを俺が説明するのは無理だな。何せ、政治が1なわけだから」

ま、無いものをねだっても仕方があるまい。

「一先ず、賊軍を探すか。出来れば賊軍の動きも把握しておきたい。仮初の主であるとはいえ、失うなんてことは騎士にあるまじきこと。そして軍として動くのは俺も初めてであるから、出来るだけ準備をしておきたい」

今の俺にできることと言えば、駆けまわって情報を得ることくらいだろう。

勿論、単騎駆けを行い敵将を討ち取ることは極めて容易であるが、それでは組織として体裁が保てん。

兵は一騎当千の英雄に縋り、自ら戦場に立つ意味を見失うであろうし、主君は見返りを求めずに莫大な戦果を積み上げる将官に疑心を感じるようになる。

曹操が器の小さい者だとは思わないが、彼女がそうではなくとも周りは違う。

徒に力を用いることは我が身を滅ぼすことになるから、やはりここは慎ましくいくべきだな。

当然、平時においては慎ましく、火急時には全力全開も止むを得ないことだがね。

「さーで、この廃墟を中心に縦横無尽に駆け回るとするか。・・・たぶん誰にも見られないだろう、たぶんな」

時速240キロを超える速度で走る人間の顔なんて覚えられるはずもないから好き勝手走っても問題ないだろう。

というか、そんな人間は普通いないわけだから誰かに話をしたとしても戯言と思われる程度、誰も信じるはずがない。

というわけで、後先考えずに縦横無尽に疾走、探索を開始する。

まずは周囲の地形に着目して、河川から調べていった。

大規模な軍団を組織する場合、兵糧も必要ではあるが何より水資源は得難いもの・・・容易に井戸を掘れるわけでもなく、掘り進んでも水が湧き出ないこともあるから、都市と河川は切り離して考えることはできない。

「川沿いを進めば何かしら手掛かりが手に入るかと思ったが、何もなかった。とすると、賊はどうやって水を賄っているのだ？」

余程多くの井戸を有しているか・・・なるほど、山間部での湧き水か。

河川とはそもそも、小さな河川が統合して一つの流れになっているのだ。

つまりは、主流を抑えなくとも、それに連なる水域さえ押さえれば水を賄うことは可能だ。

「これは実に面倒だ。幾重にも枝分かれした河川を探すこともさながら、そこに井戸や湧き水も加われば膨大な数になる。探せと言われれば探すのも吝かではないが、時間が掛かりすぎるだろう」

夏侯淵には討伐の準備があるとしか伝えていない。

当然、現地に赴いていることなど知るはずもなく、長時間見かけぬとなれば何かと問われるのは明らかである。

「可及的速やかに、そして正確に情報を掴む必要があるか」

だが、闇雲に探したところで何ら進展がないのは今経験したばかりだ。

となれば・・・

「原点に戻る、か。廃墟を隈なく探索して生存者を探そう。後は足跡と、蹄の跡から戦力を探るか」

賊が騎兵を運用しているか否かは実に有用な情報となる。

奇襲を受けた際、賊が騎兵を用いていれば逃げ切るのは至難の業になるだろう。

が、もし騎兵でなかった場合は、敵正面の兵を犠牲に本体を撤退させることも可能だろう。

再び廃墟に向かい、隅々まで探索を行う。

残念ながら、廃墟には焼死体や腐乱死体、また何やら野生動物に食われでもしたのか白骨死体しかなかった。

幸いなことに、蹄はなかったことから賊は騎兵を運用してはいないらしい。

運用していたとしても精々指揮官程度であり、脅威を感じるほどのものではないだろう。

「うーん、どうも妙だな。本当にこの街に賊が蔓延っていたのか？確かにそれは間違いないだろうが、一日二日で死体が腐るとは到底思えない」

だが、曹操や夏侯淵は確かに言っていたのだ。

隣街に賊が蔓延っているのだと。

「となると、最も疑わしいのは、これを誰が報告したのかということか」

要は誘い込まれているのではないかと言うこと。

実力があり、野心もある曹操を罠にかけようとするものがあるのではないかということなのだが・・・

「誰による陰謀か想定できぬ上に、証拠もない。机上の空論も甚だしいな」

仮に曹操に恨みを持っている者がいるとして、謀殺しようとしているのであれば疑うべきは以下の点である。

まず、街に賊が出たことを陳留に届ける者。

これは別に誰でも構わない。

街から来ただとか、賊に遭遇して命からがら逃げてきただとか、それだけで十分だろう。

事実であるかどうかは問題ないな。

ただこれだけではインパクトが薄く、信憑性が乏しい。

故に、当然ながら斥候を出して賊の規模を把握するわけだから、曹操軍の斥候兵も疑わしい。

ここにはスパイがいるか、もしくは実際に賊に会っているかの2つの場合がある。

スパイであれば、確かに賊がいたとの虚偽の報告をすれば良い。

問題なのは、実際に賊に会った方か。

賊に扮した奴らに斥候が襲われ、わざと情報を与えられて戻ってきた場合だ。

スパイであれば、自らの情報をきめ細かく報告することはしないだろうが、現に襲われた斥候の場合はきめ細かく報告するだろう。

それが掴まされた情報であれ、彼自身は命からがら逃げてきたのは違うのだから。

最後は・・・

「黄巾党に怯え、姿を晦ました州牧」

本来であれば、曹操が治める地ではないのだが、彼女の力量を知った上で誘い込んだのであればまさに州牧は策士だろう。

州牧がいれば、州牧が担うべき仕事であったのだ。

それが巡り巡って策謀となるのであれば、これほど見事な誘引はない。

曹操自身、実力と不釣り合いな刺史という立場であり、その状況の中、

州牧が失踪、隣町で賊が発生する。

なるほど、これほどお膳立てされた状況はない。

「とりあえず、陳留に戻って夏侯淵と相談か。ま、それが一番か？俺が報告するよりも夏侯淵を介して報告した方が信憑性は出るわけだからな」

そうと決めたらさっさと陳留に戻る。

あれこれ考えていたせいか、昼過ぎに陳留を出たのだが既に日が落ちようとしている。

このままでは陳留の城門が閉まってしま・・・いや、閉まっているかもしれないな。

「夜陰に乗じて城壁を越える。んー、まるで俺が賊みたいだな。だが、致し方あるまい。既に城門は閉じているだろうし、問題はなんと言いつけるかだ」

「城壁に上り鍛錬していたとも言えば十分通じるだろうか？・・・日が落ち始める前に戻ってさえいればこんなことで悩む必要はなかったものを」

喚いても変わらぬものは変わらんか。

ならば、さっさと戻ってこの廃墟のことを話すに限る。

このまま行軍を行えば州牧による奇襲攻撃を受けかねない、寡兵では危険であるとの進言を・・・

これを巧く伝えられればいいのだけだね。

知力馬鹿にはどうにも荷が重い。

「ま、なるようにしかならんか。これが俺の見当違いであれば嬉しいんだけどねえ」

第九話 初陣 前編

「どうも、リポーターの胡車児です。現在私は、隣街に蔓延る賊徒を討伐に向かっている最中です」

「？胡車児、お前は何を言っているんだ？」

「夏侯惇・・・今はそつとしておいてくれ。今の俺はちょーつとばかり鬱なんだ」

「戦を前に気分が憂鬱だと？！貴様それでも将官か！」

相変わらず夏侯惇は空気の読めない奴だ。

知り合ってまだ二日目だが、恐らく奴には表裏なくこういう奴なのだろう。

分かりやすく嫌いではないが、今はちょっと静かにして欲しい。

ま、これも自己嫌悪によるもので、夏侯惇へはただの八つ当たりなのだが。

昨日のこと、山を越え廃墟である隣街から帰ってきた俺は夜陰に乗じて城門を駆け上がり、誰にも発見されることなく忍び込んだ。

城壁の上には勿論、警備を担っていた一般兵がいたが、現実的に城壁を駆け上ることなど一般的には出来ない話で、警戒などはされているはずもなかったわけだ。

誰にも見つからず誰にも咎められないと、上々の首尾に満足しつつ与えられた部屋に帰還、したのはいいのだが、ここで儚く夏侯淵に見つかる。

「胡車児、探したぞ？一体どこにいたというのだ？」

「む、俺を探していたのか。それは悪かった。陳留には昨日来たばかりでな？街中を散策しつつ、鍛錬をしていたのだが・・・」

「呆れた奴だ。明日の準備をするといっておきながら、街を散策しているとは」

「それは大目に見てもらいたいな。夏侯惇との打ち合いで短剣が欠けてしまったね。鍛冶屋を探していたのだ。ま、見つけれなかったがね」

「というのは勿論嘘・・・ではない、実際に欠けてはいる。」

打ち合っている最中は気が付かなかったのだが、所詮は市販品、頑丈とはいっても程度が知れているということだな。

「鍛冶屋か・・・胡車児、それは市販品か？もし胡車児が華琳様に仕えると言っているのであれば腕の良い鍛冶屋に特注でもすればよいのだが・・・そんな金はないだろう」

「ああ、ないな。だからこそ仕官したともいえる。ま、金はいいでに過ぎないが、あつて困るものではなく、何をするにも金がかかるからな」

「その通りだ。まあ、正式に仕官する気になったら言ってくれ。腕利の鍛冶屋を紹介する。それとだ、胡車児は客将といえども華琳様の配下、鍛錬は練兵場で行ってくれ」

「はいはい、その通りです。で、この時間に俺の部屋にいるっていうことは、何か用事があったんだろう？俺も夏侯淵に話があったけど・・・」

隣街・・・あの廃墟で俺が推測したことについて話しておかなくては。

信憑性が乏しく、予定通り討伐が決行されたとしても、前情報無しとそうでないかでは心構えが変わってくるだろう。

「すまないが、私も忙しい身だね。姉者が書類仕事を嫌がるものだから、私に回ってくる分が多いのだよ。だから、私から先に話をさせてもらって構わないか？」

「構わない。夏侯淵が先に話をしてくれ。恐らくその話とやらは、明日のことだろう？」

「胡車児は察しが良いな。まさに明日の討伐に関することだ。華琳様率いる討伐軍1000は日の出と共に行軍を開始する。向かうは、胡車児も知っている通り、南東にある隣街だ」

ん？んんん？

ちよつと、待てよ？

今、夏侯淵はなんと言った。

南東の隣街だと？

俺が今日向かった、北西の隣街ではなく、南東の隣街だと？！

「お、おい夏侯淵、今なんといった？俺には南東と聞こえたが・・・」

「ああ、南東の隣街で間違いない。ここ最近、南東の隣街に賊が蔓延るようになってな。最初はただの荒くれ者だったのだが、次第に数が増え、治安を脅かすようになったのだ」

ぐわあああ！

なんということだ、てつきり北西の隣街だと思って北西の隣街を先行偵察していたのに！

実際は南東の隣街で・・・俺は、俺は一体何をしていたんだ。

謀殺が、畏が、奇襲が・・・ぐふう。

ここで政治が1という弊害が出てきたというわけか！

北西と南東の聞き違いなど、普通はしないだろう！

「おい、胡車児。寝るのはまだ早い、せめて話を聞いてからだ。で、その賊が街の付近に拠点を構えて・・・ああ、老朽化して既に使われていない砦を根城に大よそ4000ほどに膨れ上がっているようだ」

「・・・なるほど、4000か。それは実に多いことだな。で、どうするんだ？寡兵で勝てば名は得ることが出来る。だが、死んでは元も子もないぞ？」

恥ずかしくて死にたくなるが、今は夏侯淵の話の聞かなくては。

俺の偵察が無意味になった以上、夏侯淵から聞けるだけ情報を得るしかない。

「その通りだが、所詮賊は烏合の衆であり、正規の訓練を受けた軍の敵ではない。これは慢心ではなく、ただの事実だ。賊は4000と兵だけはあるが、小突けば指揮が崩壊するほどに軟弱だからな」

「それはなんだ、経験則か？前のそうであつたから、今回もそうであろつというわけじゃないだろう？呼び名は賊であれ、中身は違うんだ。違う結果も十分にあり得るぞ」

確かに、夏侯淵が言うとおり正規軍と賊軍では兵の訓練の度合いが違う為、戦えば正規軍が勝つだろう。

だが、それも1対1では勝つだろうが、1000対4000ではまた別の話だ。

陳留から南東つてことは、俺がこの世界に來た場所だろう？

つてことは、ただただ荒野が広がるばかりで、4倍差という兵力差に正規軍が飲み込まれんとも限らん。

包囲をされずとも、自軍の4倍の兵が敵にいるというのは圧倒されるに違いない。

「まさか、事前調査による推測だ。とはいえ、経験則も確かに含まれている。南東の賊軍は急速に成長した結果、満足に装備が行き渡らず、鎧は布か皮、武器は剣でも持っていればマシな方で素手が多数だ」

「なるほど、確かにその賊軍に正規軍が当たれば容易に打ち破ることが出来るだろう。武器を持たぬ相手など、相手にはならん。で、目標はどれほどだ？賊の全滅を目標とするのか？」

「当然、賊軍は一人残らず首を刎ねる。というのも、胡車児、お前は知っているか知らないが、一月ほど前、陳留の北西の街が賊に襲撃されるということがあった。その報を華琳様が受けたときには既に街は廃墟と化し、残っていた賊軍を討ち捨てることしか出来なかった」

「ははあ、つまり今回の賊軍はその残りも含まれているというわけか。ある意味弔い合戦でもあり、勝たねばならないし、逃がしてはならないというわけね」

「ああ、そうだ。相手より寡兵で攻め込めば、奴らも勝機を見出して果敢に攻めてくるだろう。自らが誘い込まれたなどと露知らずにな」

それなら更に勝機は上がるな。

恐らく、曹操の討伐軍には廃墟になった街からの志願兵が多くいるはずであり、極めて高い士気を期待できる。

寡兵相手と侮れば、その手痛い一撃を貰ったときの賊軍は・・・指

揮官がいなければ潰走は免れまい。

「用意周到なことだ、それだけの条件を整えれば負けるほうが難しい」

「華琳様に出来ぬことなど何もない。でだ、胡車児には討伐隊の1部隊を率いてもらいたい。華琳様には本隊を、姉者には騎兵隊を、私は弓隊を、後は歩兵隊がいるのだが人が足りぬのだ」

「俺に歩兵隊を率いれというわけか？正気か！？俺には兵を指揮することなど出来んぞ！」

正気の沙汰ではない！

統率1の俺に兵を率いれとは・・・最初から混乱壊乱恐慌状態で兵士を戦わせるようなものだぞ！

たぶん。

「そうだ。どの道華琳様の下で武官として活躍するのであれば、兵の千や万くらい率いてもらわねば困るのだ。幸い、今回は数百と小勢であるから、胡車児が不得手とはいっても問題ないだろう」

「俺が、俺が敗北の一因を担うことになるのか。ぐぐぐ・・・どうなってもしらんぞ！」

「そこを巧くやるのが胡車児の腕の見せ所だろう。期待しているのだ、良い戦果を頼むぞ」

夏侯淵め、言いたいことだけ言って出て行きやがった。

良いだろう、お前達が俺に兵を率いるというのなら率いてやる。

お前達は俺に信を託したのだ。

ならば、俺はその信に報い、勝利をもぎ取ってやろう！

つてのが昨日の出来事なのだが・・・

「って、奮い立ったのはいいけど、やっぱり無理な気がする。もう既に、俺の隊、胡車児隊は崩壊寸前だからな」

「また、胡車児は何を言っているのだ。戯言を呟いている暇があれば貴様の隊をなんとかしろ！」

「夏侯惇の言うことも最もだ・・・が、だめだ、俺には兵を率いる才能が本当に欠片もない」

俺の後ろを行軍する胡車児隊は、皆、目が虚ろで生氣を感じさせない。

こいつらも陳留を出る前は元気だったんだけど、次第に意気消沈して仕舞いには亡者の行軍のようになってしまった。

もうなんか、統率1つて酷い。

今回の討伐戦で最大の敵は間違いなく俺だな、俺。

俺が一番の強敵となるだろう。

「夏侯惇様、前方に砂塵を確認！賊軍かと思われます！」

あれこれ、考えているうちに賊軍と遭遇。

というよりは見るからに寡兵であることに釣られて突撃を仕掛けてきた感じが。

「ご苦労。では、我が軍も所定の配置につくでしょう。胡車児、貴様、賊軍を少しでも後ろに逸らして華琳様や秋蘭の手を煩わせて見る！後でこの私が・・・」

「はいはい、わかったわかった。ちゃんとやるさ、うまくやる。敵を逸らさずにちゃんと前線を支えきるさ、期待していてくれ」

「ふん、言ったからには実行してもらっぞ！」

夏侯惇が率いる騎兵は側面待機の遊撃部隊。

基本は俺が率いる歩兵部隊が前線を支え、後方から夏侯淵の弓隊による斉射で敵兵を討ち取る。

曹操は後方予備だが・・・この分だと早々に前線に来ることになるか。

こんな目が虚ろな亡者共では前線を支えることなどままならない。

まったく、誰のせいだろうか。

「胡車児隊、構え！我が隊は敵軍を正面から受け止める、後方には我が隊を援護する夏侯淵隊と、本隊である曹操様がいらっしやる！」

くれぐれも、抜かれることのないように！」

「・・・うわああああ！敵だ！敵だ！敵が来るぞ！もうだめだあああああ！」

一瞬で恐慌状態になってしまった。

お前ら、後方で味方が援護しているっていったらどう！

それに、総大将である曹操も後方予備としているんだ！

お前達が、恐慌状態になったら誰が総大将を守るといふのだ！

敵軍を正面から受け止めるって言葉だけに反応するんじゃない！

肝心なのはその後だ、後！

「はあ、もうだめだ。これでは兵らに期待することはできん。かくなる上は・・・」

俺が一人で支えるしか、それ以外に術はないということだな。

第十話 初陣 中編（前書き）

第十話の十が漢数字じゃなかった・・・
ので修正しました。

第十話 初陣 中編

それは討伐に赴く前のこと。

「華琳様、本当に胡車児に一隊を任せてよろしかったのですか？」

これは私の率直な意見。

華琳様が胡車児に何を見出したかはわからないが、つい先日客将として用いられるようになった胡車児に一隊を預けたのにはどんな意味があつたのだろうか。

華琳様の采配に疑いを抱くわけではないが、どうしても気になることであつた。

「秋蘭も春蘭と同じことをいうのね？まあいいわ、貴方にも説明してあげる」

姉者も同じことを華琳様に問うたのか。

確か姉者は私よりも前に華琳様の部屋に入って・・・そして機嫌よく出て行ったな。

閨に呼ばれたわけでもないというのに、一体何があつたのだ？

「秋蘭、貴方は胡車児の実力をどう見るかしら？」

「胡車児は武力に優れた者です。姉者を相手に引けを取らず・・・場合によっては打ち負かしていたかもしれません。私が止めなければ

ば、兵たちが見守る中で姉者が負けるといふ結果になっていたのではないかと思います」

事実、胡車児の実力は高かった。

最初は侮辱とも取れるほど手を抜いていたが、次第に姉者と打ち合うほどの実力を私や兵に見せつけた。

姉者は好敵手と思い喜んでいたようだが、私にはまだ胡車児に十分な余力が残されているように感じたのだが・・・

それを姉者から聞いて、実際に見てみようと思つたのだとでもいうのだろうか。

実物を華琳様自身が見て判断するというのは実に華琳様らしいが、寡兵での討伐戦で行うのは危険ではないだろうか？

胡車児も私に対して慢心をするなど釘を刺してきたこともある、胡車児に一隊を任せたのは失敗だったのではないか。

「そうね、春蘭もそう言っていたわ。それに胡車児本人もそう言っている。私が見たところ、彼は策謀の才能もあるはずよ？彼は意思疎通が取れないと称していたけれど、その割には私と十分に話せているわ。自身の実力も十分に理解しているはず」

「ええ、それは私も思っていました。胡車児は雄弁で知恵も良く働く、それでいて意思疎通が取れないなどというのは不思議としか言えようがありません」

「それなのに、彼は武力以外に優れたところがなく、兵の統率が執

れないという。文官の才についてはここはおいておくとして、秋蘭普通、武力に優れた武官で指揮がうまく取れないとは、どういった者を指すかしら？」

大抵の武官は、それなりに指揮を執ることができる。

勿論、武官自身の才能もあるが、武官にとって戦闘とは極めて身近なものであり、自身の証明をするところでもある。

故に、武官は戦場で活躍しようと武を磨き、統率を極めんとする。

胡車児の場合は、武だけが極めて優秀でありながら、統率が貧弱だと称する点にある。

それは即ち・・・

「胡車児には兵を率いた経験がないということでしょうか？あれだけの武に恵まれながら、兵の指揮を執ったことが無いとは考え難いのです」

「そう、恐らく胡車児には兵の指揮を執ったことがない。彼は武に恵まれすぎているとでもいえるのかしら？これまで、彼一人で済むようなことが多かったのでしょう。故に、彼は兵を指揮する機会を持たなかった。勿論、諸国を行脚しているというのも原因の一つでしょうけどね」

自身が仕えるべき主を探して各地を行脚しているといったが・・・なるほど、そうであれば兵の指揮を執ったことは無いだろう。

実際、出会ってすぐの武官に指揮権を与えろということ自体が異例

なのだ。

華琳様の行った人事は極めて異例で、だからこそ私が華琳様の下に来ている。

ふむ、確かに華琳様の言うとおりである気がする。

胡車児は確かに、武に秀でているが、見方によればそれは秀で過ぎているともいえる。

彼が自身の實力ゆえに兵の指揮を執ったことが無いというのは、確かに納得できる話である。

これで一つの疑問は氷解したが・・・では、華琳様は何故、そうと知りながら胡車児に兵権を渡したのだろうか？

指揮を執ったことが無いものに、指揮を執れとは無茶が過ぎるのではないか？

胡車児に統率の才があると、華琳様はそう判断しているのだろうか？

「華琳様、だとすればどうして胡車児に兵を与えたのです。今の言では、華琳様は胡車児が兵を指揮したことがないと想定した上で彼に兵を与えています。せめて、優秀な副官でも与えねば・・・」

「その優秀な副官がいないということは秋蘭も知っているでしょう？そもそも、私の軍はそれほど戦闘経験に恵まれているわけでもないわ。調練だけは怠らないように心掛けてはいるけど」

ああ、だからこそ胡車児を推挙したのだ。

本来であれば、出会ってすぐの武官などを推挙したりはしないのだが、今回は討伐という極めて身近に戦闘を予定していたことと、胡車児が極めて優れた武を有していたからな。

ここで逃すには惜しい、優秀な副官、いや、将官となるのではないか。

そう思ったから推挙したのではないか。

「秋蘭、貴方の懸念も尤もだけど、この討伐戦の後のことを考えてみなさい。私が明日の討伐戦を寡兵にて勝利したらどうなるかを」

「討伐戦後ですか・・・恐らく、華琳様の武は大いに認められ、現在州牧が空いているということもあり、報奨として州牧の地位が与えられるかと思いますが」

「そうね、私も樂觀視をしているわけではないけど、そうなると踏んでいるわ。ねえ、秋蘭。もし私が州牧となったら、私が率いる軍の規模はどれだけのものになるかしら？刺史ではなく州牧として、それは今とは比べ物にならない規模の兵を采配することになると思うのだけど」

華琳様が州牧となれば、恐らく今回のようにたった1000の兵を率いて討伐に向かうなどということはありえない。

というのも、現状の限界が1000人であるからこそ、1000の兵を率いて討伐するのだ。

州牧という立場であれば、より多くの兵を動かすことが可能である

わけで、1000以上もの兵を動員することは造作もないことだろう。

「それはつまり、今のうちに胡車児に経験を積ませようとの考えでしょう。何れ彼も大部隊を率いることになる、そういうことでしょうか」

「そうよ。だからこそ胡車児にはここで統率とはなんたるかを学んでもらわなくてはならない。今回の賊を軽視するわけではないけれど、賊の陣容は秋蘭も重々把握しているでしょう？」

今回の賊は報告によると、歩兵のみで半数以上が武器を持たぬ烏合の衆。

なるほど、これでは実際の兵力差は悪くても2倍というわけか。

そして烏合の衆ときたら、最悪姉者の突撃のみで士気を瓦解させることも可能だろう。

「賊が烏合の衆であり、貧弱な武装であることも相まって、今回は経験を積ませるに最適の機会であると。華琳様はそうおっしゃるわけですね」

「秋蘭も想定しているとは思いつけど、武装の整っていない賊軍相手なら私自らが行かずとも春蘭だけでも十分討伐可能でしょう。だから、今を除いて他に経験を積ませる機会はないの。それに、胡車児の指揮が不得手だとわかった場合は私の部隊が全面に回るわ」

「それでは華琳様が敵を真正面から受け止めることに。それは危険です！私が代わりに前線の部隊を押し留めますので華琳様には弓兵

の指揮をお願いいたしたく・・・」

「秋蘭は胡車児をあまり信用していないのね」

「当然ではないですか。華琳様もおっしゃった通り、胡車児が兵を率いたことがない・・・初陣であつたとしたら、それだけで華琳様を危険に晒すことになります」

「ねえ、秋蘭。貴方は胡車児を見て何か感じなかったかしら？貴方の目に映つたのは、彼が武に優れているということだけだった？私には・・・そうね、彼がとても魅力的に見えたわ。今まで男なんて大したことないと思つていたのだけどね」

華琳様が男を褒めるなど・・・いや、確かに華琳様でも男を褒めないことがないと言わない。

確かに華琳様であれば、真に優秀な者はそれが男であれ褒めることはあるだろう。

しかし、本当に胡車児は優れているのだろうか。

華琳様の言うとおり、胡車児は非常に目を惹く存在であると思うが・・・

「兵を率いるのには確かに統率といった経験は必要でしょうけど、胡車児には誰もが持ち得ないものを持っているわ。彼が持つ魅力というものは、統率の無さを補つてなお兵らを奮い立たせるでしょう」

なるほど、経験乏しく指揮を満足に執れぬのなら、魅力・・・いわば兵を惹き付け魅了して纏めあげてしまえば良いと。

戦場において最適解を求めることが出来ずとも、一致団結した部隊というものは非常に強力であることは確か。

それに加え、経験を積んだ部隊であれば、なお強力なことは言うまでもないか。

「華琳様は遙か先を見据えているのですね。明日の討伐戦などは踏み台に過ぎず、それを経た先の未来を考えているとは」

「分かってくれたのなら幸いよ。春蘭は・・・胡車児が使い物にならなくても、貴方が居れば大丈夫と言っただけで舞い上がって出て行ってしまったから」

姉者・・・姉者はどうしようもないくらいに姉者だ。

・・・

「と、あの場では納得したものの、やはりこれでは無理だろう。現に胡車児の部隊は壊乱状態、隊列は乱れ、とても戦えるような状況ではない」

華琳様はああ言っていたが、胡車児には統率の才がないとしか言いようがない。

「そうかしら？私はまだ見物しているつもりよ、秋蘭」

「なっ！？華琳様、いつのまにここまで！華琳様の隊は私の弓隊より後方に布陣していたではありませんでしたか？」

「胡車児に前線を任せたのは私の采配。彼が無理であれば私が支えなくてはならないのだから、いつまでも後方待機をしているはずがないでしょう」

「ですが、危険過ぎます！敵は勢いに乗っており、前面を受け持つ胡車児隊は意気消沈、潰走するのは目に見えています！」

「そうね、現状はどうみても秋蘭の言うとおりでしょう。だけど・
・胡車児を見てみなさい。あの顔を、何か企んでいるような顔に見えないかしら？」

む、確かに。

先ほどは何かを諦めたかのような態度を見せていたが、今は何かを企んでいるかのように見える。

声高々に演説をしているようだが、いったい何を・・・

「うおおおお！胡車児隊、我に続けっ！」

壊乱状態で今にも潰走しかねなかった胡車児隊が、急に息を吹き返し、賊軍に向かって突撃を行う。

「ふふふ、秋蘭。私が言ったことは間違っていたかしら？」

「いえ、華琳様の御慧眼、まことに感服する限りです」

「それもこれも、胡車児を推挙してくれた秋蘭のおかげよ。今晚は可愛がつてあげるわ」

華琳様もご機嫌で、この討伐戦も大勝を収めることが出来そうだ。

ふむ、だがいったい胡車児は何をしたというのだ。

今の奴が行っていることは、最前線に自らが立ち、そのあとを兵らが続くといったものなのだが・・・

討伐が終わり次第胡車児に聞いてみるか。

あれだけ乱れていた軍を瞬く間に鎮静させ、士気を高めるなどに見事としか称せない。

これも奴が持つ魅力、魅入られるとはこのことを言うのだな。

第十一話 初陣 後編

「・・・うわああああ！敵だ！敵だ！敵が来るぞ！もうだめだあああああ！」

チツ！一体何が原因だ！

流石に統率1だからとはいえ、部隊が常に壊乱状態であるのはおかしいだろう！

何か俺が見落としていることがあるのか？

統率能力が乏しいから、隊を満足に掌握できないことは想定していたが、これは些か行き過ぎだろう。

練兵場で夏侯惇と打ち合い、俺自身が武に優れているということは見せつけたはずだ。

夏侯惇に引けを取らない俺が指揮をして、それが通用しない理由は・
・

なるほど、要は兵からの信用がないのか。

前面から総勢4000もの賊軍が胡車児隊目がけて突撃を仕掛けてくる。

勢いに吞まれているのは胡車児隊であり、呑みこんでいるのは賊軍だ。

多勢に無勢、今ここで留まるために必要なのは彼らを奮い立たせること。

逆境においても決して退かず、同胞を護るために踏ん張り支えようとする意思が何より必要。

だが、兵を指揮しているのは、昨日練兵場に現れたばかりの見知らぬ指揮官。

必ずしも全ての兵があの時練兵場にいたわけではなく、夏侯惇との試合を見ていなかったものもいるだろう。

そして俺自身、統率が1だという言葉に踊らされて陰鬱な表情をしている。

なるほど、確かにこれでは兵が恐慌状態に陥るのも当たり前だ。

何せ、俺は彼らから信頼を勝ち得ていないのだ。

彼らと共に戦ったことは無く、彼らと共に訓練したことも無く、そして俺自身に合戦の経験が無い。

さて、多勢に無勢が分かり切っている今回の戦いで、自らを指揮する者がそのようなものであったら・・・兵はどう感じるだろうか。

同じ、多勢に無勢という状況にありながら夏侯惇や夏侯淵の部隊は意気軒昂であり、夏侯惇の部隊の騎兵などは今か今かと突撃の時をじれったく待ち構えてすらいるように見える。

それに加えて俺が率いている部隊は・・・

単純に、捨て駒だと、兵たちもそう認識しているのだろう。

でなければ、こんな無名の指揮官が最前線を指揮するはずがないと。

代わりに勇猛な夏侯惇が指揮を執り、前線を支えてくれるはずだと。

彼らはそう思っているに違いない。

であるとするならば、今の俺には何ができる。

この討伐戦を持って初陣、兵を統率した経験はなく、才能も能力値からして皆無なのは確実。

「そんな俺がこの部隊を鎮静化させ、奮起させ、突撃を行うにはどうすれば・・・」

ふと右手を見遣る。

刃こぼれをした短剣を手に思った。

自らの武具の管理が出来ぬ将官がいるだろうか？

武器に劣化を認めておきながら、それをそのままに合戦に赴くものがはたしているだろうか。

所詮短剣は聖遺物での攻撃を隠すためのものでしかないと思直に考えていたのではないだろうか。

活動段階の聖遺物は他者には見えない。

故、彼らが目にするのは刃こぼれした短剣のみであり、聖遺物である戦雷スルーズフルキューレの聖剣ではない。

「これでは兵が従わぬのも当然ではないか。統率どころの騒ぎではない、それ以前の問題だ」

今更悟つても仕方がない。

既に合戦の幕は切って落とされており、今なお胡車児隊に向かって賊軍が俺達を刺し殺そうと差し迫っている。

さて、どうすべきか。

この現状、如何にすれば打開することが可能だろうか？

こういったとき英雄譚ではどのように・・・ああ、なるほど。

まだ手は残されているな。

俺が持っている剣はなんであつたか。

戦雷スルーズフルキューレの聖剣、かの軍人が「同胞たちが道を見失わないよう、戦場を照らす閃光になりたい」との渴望を抱いた武器ではないか。

「道、道か。切り開くだけの力はある。後足りないものは彼らに従わせる力・・・」

統率はないが魅力はある。

士気は出来ぬが信奉させることは不可能ではないだろう。

だが、信奉させるには結果がいる。

即ち、俺自身が突撃を仕掛けて、勝利を得ることができるとの証明をしなくてはならない。

そうと決まれば話は早い。

敵は待つてくれないのだから、進むよりほかないのだ。

「何気に初めての形成位階か。スルーズ ワルキューレ戦雷の聖剣を具現化するのもこれが初めて、実物を見るのも初めてだな・・・形成！」Yetzirah

短剣をしまい、聖遺物を具現化させる為に叫ぶ。

Yetzirah形成によって具現化された聖遺物、スルーズ ワルキューレ戦雷の聖剣は蒼く、そして稲妻を彷彿とさせる独特の刀身をしていた。

「これが実物の戦雷の聖剣か。スルーズ ワルキューレハハハ、これではまるで英雄にでもなったかのような。実に立派な剣、いや宝剣だな」

武器は整い、後は俺が鼓舞を行うだけ。

兵らに問いを投げかけ、彼ら自身に同胞を護るために戦うと、その意思を持ってもらうだけだ。

失敗は許されない。

いや、曹操なら俺がこの状況に陥ることを想定していたのだろうが、ここで俺がなんとかしなければ、胡車児隊は全滅、無駄死にを増やすだけだ。

故に、やはり失敗は許されない。

たった一度の鼓舞で壊乱状態にある部隊を高揚状態にする。

そんな経験をしたことのない俺が、俺がやらなければならない。

「曹魏の兵らよ、聞け！今お前たちは無勢という立場にありながら、多勢を向かえ討たねばならない！」

「4000という大軍を前に寡兵に寡兵を重ね、胡車児隊というただ一隊のみで前線を支えねばならない！」

「何故なら、我が隊の後方にはお前らが主君を仰ぐ曹操様を始め、夏侯惇將軍、夏侯淵將軍、そして更に後方にある陳留には家族親族である護るべきものが居るからだ！」

「負ける、勝てぬと、お前らはそう思っていることだろう！総員1000名である曹魏の兵の内、ここには胡車児隊しかないのだ。そう思うこともわからぬでもない！」

「だが、お前たちは、日々夏侯惇將軍、夏侯淵將軍の指揮下で鍛錬を積み自身を磨き上げてきた！そんな曹魏屈指の精鋭であるお前たちと寄せ集めに過ぎぬ賊軍とが同等であるはずがない！」

「見る！お前たちの背後を護る同胞の姿を！我が隊が前線を支えるお蔭で、彼らは安全にそして強力に我らを援護することができる！」

「感じるのだ！決してお前たちは戦場で独りではなく、共に肩を並べ戦い、助け合う同胞がいるというのだと！」

「お前たちが、無名の武官に率いられ、不安で逃げ出したくなる気持ちもよく分かる！」

「無名の武官とは私のことだ！私という存在が、お前たちを不安にさせてしまったのはまことに申し訳ない限りだ！」

「故、もしお前たちが、不安に耐え切れず逃げ出すというのであれば、それは私の責任であり、お前たちに何ら罪はない！」

「この発言に偽りはなく、私はお前たちに突撃せよ、玉碎せよなどとは決して言わない！」

「今、胡車児隊は極めて劣悪な状況にある。壊乱し、隊列は乱れ、全力を出して戦うなどとは不可能に近い！」

「当然、この場で踏みとどまることすらできずに、鎧袖一触蹴散らされることは目に見えている！」

「だが、賊軍に対して攻撃を仕掛けるのであれば曹魏は勝利を手に行うことができる！」

「勝利を確信し、浮足立っている賊軍に対して、曹魏の精鋭であるお前たちが突撃をすれば打ち破れぬはずがない！」

「・・・私はこれより、単騎にて賊軍への突撃を行う。私はここにきてようやく、お前たちに進むべき道を示すのだ」

「もし、お前たちが！未だその胸に、故郷を、同胞を思う気持ちが
あるのであれば！」

「どうか、私が駆け抜けた後をお前たちに付いてきてもらいたい」

「これは私の願いであり、決して命令などではない。では、胡車児
隊、各々が信念に従い行動せよ！」

言い終わると同時に賊軍へと駆ける。

これで無理だとするなら俺には兵を率いることなど到底無理だ。

今この場で出せるだけのものは出し切ったつもりだからな。

ま、何とかなるか？

胡車児隊の虚ろな目も次第に光を取戻し、高揚状態に至ったと思わ
れる。

だが、最後には彼ら自身の選択で立ち向かわなくてはならない。

行動の指針を将が示すのはいい。

だが、結局、腕を振るい敵を屠るのは彼ら自身なのだ。

彼らの腕を振るい、敵を薙ぎ払うという行為を俺が代わってやるこ
とはできないのだから。

縦横無尽に敵を切り裂く。

スルーズ フルキューレ
戦雷の聖剣を前に防ぐ手段などなく、肉や骨、たとえ盾だとしても何もなかったかのように両断する。

が、いくら俺が屠ろうとも敵は減る気配を見せない。

そりゃ当然、一振りで一殺出来るのであれば、全てを屠るのに4000振り必要だからな。

「うおおおお！胡車児様に続けっ！」

振り向けば、後方から胡車児隊が突撃を仕掛けている。

敵に囲まれ、思うように後方を振り返ることはできないが関の声がここまで届いてきた。

「ハハハ、なんだ。俺もやればできるってことか？」

兵らは兵らで考え動いたただけとしても、彼らに影響を与えることができたのはやはり俺自身の力によるものだろう。

思わず笑みがこぼれる。

「うおおおお！胡車児隊、我に続けっ！」

釣られて俺も叫んでしまった。

兵数から考えれば死地へ赴けというようなものであるが、大丈夫だろう。

賊軍は大いに浮き足立ち、胡車児隊の勢いに吞まれるだろう。

死に体であつた部隊が突然、翻して突撃をしてくるのだ。吞まれぬはずがない。

「胡車児隊に後れを取るな！我らが騎兵の妙技、賊軍に見せつけてやれ！」

どうやら夏侯惇も突撃を開始したようだ。

恐らくこの分では、時期に本体も突撃を行うだろう。

勝ちが決まり、後は掃討戦といったところか。

とはいえ

「気を抜くにはまだ早い。まずは着実に、この戦域での賊軍を蹴散らしてからだな」

胡車児隊を労うのはそのあとでいいだろう。

第十二話 初陣 反省会

「胡車児、御苦労だったな。途中までは冷や冷やさせられたが見事な采配だったな」

賊軍との戦闘を終え、休息中のところ夏侯淵に話しかけられた。

確かに結果だけ見れば、見事な采配と言えなくもない。

俺が率いた胡車児隊は、俺が穿った後を忠実に追随・・・まさに鋒矢の如く賊軍を食い破った訳だ。

将兵共に勇猛果敢で、鎧袖一触、瞬く間に賊軍の士気を喪失させた。

こういえば、まさに歴戦の英雄にでも率いられた部隊のように感じるが、そんなことはない。

現実、胡車児隊は攻撃直前までは常に恐慌状態でいつ潰走してもおかしくない状況。

指揮官は兵の指揮を行ったことがなく、兵らは知らないが俺には統率を行う才能がない。

そんな八方塞がりの状況で一計を案じ、無事部隊を立て直すことに成功。

結果、九死に一生を得たというのが紛れもない現実だったのだ。

「夏侯淵か。いや、俺の采配は終始酷いものだった。兵たちの気持

ちを酌んでやらなかったのだからな。その結果があの恐慌状態だ」

「なるほど、確かに合戦を始める前の胡車児隊は見るに堪えなかった。だが、合戦が始まり、敵陣に突撃を仕掛ける時には精鋭部隊へと変わっていたではないか」

「誰もが死を前に感じたんだろう。こんな所では死ねない、まだ遣り残したことがある。そんな状況であれば、誰もが果敢に戦えるさ」

「そうかな？私は恐慌状況に兵が陥ったとしたら、間違いなく逃走を始めと思うぞ。あの状況で立て直したのは偏に胡車児の実力であらう」

「夏侯淵はやけに俺を過大評価する。俺にはそんな実力はない。今回もたまたま成功しただけで、次に同じことをやれば壊滅は必至だろう」

「それは別に誰にでも言えることだ。誰しもが失敗する可能性を秘めているわけで、結局頼りになる者は土壇場で巻き返しが図れる者だろう」

「前提条件に満足に行軍を行える者、とあれば確かにそれは正しいが。現に俺には統率を行う才能はない。今回のことでそれがよくわかった」

「それでもう指揮を執らないと？ふむ、だがな胡車児。貴様には統率に恵まれていなくとも、類い稀な才能を有している。それが何かわかるか？」

「わからん。少なくとも、俺が自信を持つて言えることは単騎で駆

けるだけの武があるということだけだ」

「魅力だよ。いや、人を惹き付けると言った方がいいだろうか？ 胡車児には、兵を熱狂させる才があると私は思う。これは、華琳様も同意見だ」

「・・・俄かには信じられんな。一体何を根拠にそう思う。兵を熱狂させるだと？ 現に俺の隊は死に体の恐慌状態だったのだぞ？」

「ああ、そうだな。確かにあの状況ではそうだっただろう。だがな、今の胡車児隊を見るがいい。あの喝采を、あの熱気を。あれは全て胡車児、お前が指揮をしたからこそそのものなのだぞ」

「・・・そうだな、確かにそうだ。今回の件を以て、奴らは何の疑いもなく俺に付き従ってくるのだろう。寡兵よく大軍を破る、まさにその経験を与えてしまったのだからな」

「故に、胡車児。お前が将官として戦場を離れることはできん。彼らの期待に応え、兵を指揮しなくてはならないのだよ」

「そう、そうだとしても俺が俺を認められん。夏侯淵の言うことは良く分かるが、先に俺が話したことは全て事実なのだ。万事において満身に統率出来ぬ以上、俺にはできぬよ」

「ははは、胡車児、思考が硬直しているぞ。確かに、お前は長所もあり短所もある。先を考えるのだ、出来ぬからやらぬではなく、出来るようになる。今回の討伐戦でお前の実力は華琳様も拝見なされた」

「ああ、そうだろうよ。で、夏侯淵は何が言いたいのだ」

「胡車児、一人で出来ぬなら頼れば良い。華琳様はお前の実力を鑑みて自らの副官に任命することにした。兵の采配に関して華琳様の右に出るものはいない。存分に学ぶといい」

この後も夏侯淵と長い答弁を交わしたが、決して折れぬ夏侯淵の前に俺が先に折れた。

嫌々な顔をして首肯したが、あいつはそれでも満足して去って行ったな。

やれやれ、どうして俺にそんな役をやらせたがるのだ。

曹操の副官となることは別に構わない。

未だ主君と認めたわけではないが、そういった関係になるのは俺が望んでいたことであり不満などありはしない。

が、どうしても指揮を執らせたいらしい。

確かに、指揮を執れるものが増えればそれはそれで采配に多様性が出るだろう。

だが、リスクが高すぎると俺は思うがね。

「学ぶ、か。二度と部隊を危険に曝さぬように、初期値がどうであれ成長するしかないか」

「ええ、大いに学ぶべきよ。胡車児、貴方は武官として完成していると言えるほど武に優れている。けれど、それでは不完全、将とし

ての才もあるのだから必死で学びなさい」

夏侯淵が去って今度は曹操。

いつの間にやら人気者になってしまったかな。

「将として学ばせる為に俺を自身の副官にしたのか？」

「そうよ、光栄に思いなさい。そして私を失望させぬように努力しなさい。この曹孟徳が胡車児、貴方に将官としての才があることを保障してあげる」

「期待されていると思って良いのか？あれだけの失態を仕出かしておきながら、それでも尚期待するのか」

「貴方は欠点を認識できているのだから、私は何一つ咎めたりはしない。そうでなければ・・・そうね、首でも刎ねていたかしら？私の好奇心が過ぎたこともあったでしょうけどね」

「今、この場で刎ねておいたほうが後々に悔いることがない・・・いや、失言だったな」

「霸道において悔いるなどという愚行はない。よくわかっているわね、胡車児。それで、貴方は罰が欲しいのかしら？無罪放免が気に入らないなら、私が誇れる将官となりなさい。それが貴方に与えられた罰よ」

「参ったな。誇れる将官となれ、か。簡単に言ってくれるねえ」

「あら、貴方になら出来るでしょう？ま、時間がかかったとしても

気にしないわ。才ある者は好きだけど、才が磨きあがっていくのを見るのも、それもまた好きよ」

人材マニアの曹操の名は伊達じゃないって奴か。

ま、俺も成長物の英雄譚は好きだから、原石が磨きあがっていく様を見るのが好きという気持ちも分からんでもない。

どの道、俺は変わらなければならないのだ。

二度とあんな無様な真似をするわけにはいかない。

主君を同じような目に合わせることは絶対に避けなくてはならないからな。

そんな俺の都合と、曹操の期待が重なるだけ・・・そうそれだけなのだ。

彼女の期待にも応えるために、ここは物語の主人公らしく頑張りますか。

と、その前に一つやることか

「・・・改めて名乗っておこう。姓は胡、名は車児、字は持たん。真名は直衛だ。これからもよろしく頼む、曹孟徳殿」

「華琳よ。直衛、これから私のことは華琳と呼びなさい。正式な任官となった以上、そんな他人行儀な呼び方は許さないわ。後、春蘭と秋蘭とも真名を交換しておくように」

真名を交換するまでに要した時間は僅か二日か。

それだけ密度の濃い時を過ごしていたといえなさうなのかもしれないが、些か進み過ぎであるように感じる。

悪いことではないから気にする必要もないのだが・・・

何か嫌な予感がしないでもない。

気をつけておかないと、とても悲しいことになるような。

「曹操様、夏侯惇將軍からの伝令です！賊軍を追撃した先、山中にて賊軍の根城を発見。規模は2000名程とのことです」

「深追い無用。夏侯惇將軍は至急、本隊と合流せよ。そう伝えなさい。ご苦勞、下がって良いわ」

ということは、今回の討伐戦はここで切り上げて、根城を落とすのはまた次回ということかな？

糧秣も余分に持ってきているわけでもなく、兵に余裕があるわけでもない。

寡兵である故に、負傷兵の数は戦力に大きく響いてくる。

それに攻城には三倍の兵力が必要だという。

皆もその例外ではなく、攻めるのであれば少なくとも糧秣は万全に、将兵の傷は癒しておく必要があるだろう。

つまり、一旦陳留に戻る以外に術がないということか。

「根城を見つけたが落とすのには糧秣が心もとないか？死傷者は少なく、行軍することも不可能ではないと思うが」

「・・・胡車児隊は逆境からの快進撃、兵たちは精も根も尽き果てているわ。何故か目だけは輝いているけれど、戦闘に耐えられるとは思えない。継戦は現実的ではないわね」

目だけは輝いているって・・・行きとは逆の現象か。

やれやれ、俺に付き従ってどうするというのだ。

どうせなら、夏侯淵に付き従えばいい。

あいつなら無闇矢鱈と兵を危険に曝す真似はしないだろうから。

「わざわざ、俺の隊を例にしてくれてありがとう。ま、糧秣に関しては、街から徴発するのも手段だろう。我々が去ることにより再び危険に曝されるというのであれば、彼らも協力すると思うが」

「それは期待できないわ。既に、報告の任を受け街に向かわせた兵が門前払いを受けた。新手がいるということは知らないとはいえ、それがあの街の態度というわけよ」

「あの街は県令が治めていたのだろうか？そして、しばらく統治者がいない間に民が十分な自治権を持ったと。大方、一部の層が自治権を奪われるのを恐れ、拒んだのだな。となれば、全軍で陳留まで帰還するしかあるまい」

分からぬでもない。

税を納める立場から、税を集める立場に変わったのだ。そう易々と譲るには、魅力がありすぎる立場ではある。

色々言いたいことはあるが、華琳は陳留刺史であり、かの街は支配域ではないからな。

陳留まで下がり、補給を済ませる必要があるだろう。

野営を行い、糧秣を待つのも手ではあるうが、ここでは満足に負傷兵を癒すことができん。

「ままならないわね。直衛の言うとおり、一旦陳留まで戻り、兵站を整えてから出直したほうが良いでしょう」

「それもこれも、華琳が刺史だけでなく州牧も兼任することが出来れば、一気に解決する問題ではあるんだがな。ま、賊軍を討伐後、委細を報告して・・・報酬に州牧位も貰えたら完璧だろうなあ」

「無い物を強請るのはやめなさい。今出来ることを考え行動するのよ」

尤もな話でございます。

「そういえば、直衛。貴方はそちらの話し方が素なのかしら？そして今までは猫を被っていたと」

「立場と距離を弁えていたつもりなだけだな。ま、素はこんなもんだ。堅苦しいのは苦手だね？間違っても、俺を外交の場になんか

連れて行くんじゃないぞ。連れて行つたとしても外で待機が最適だ」
このまま話していたらまたアレコレと言われて・・・気が付けば言いくるめられているに違いない。

こういうときはさつさと逃げる。退却の準備もしなくてはいけないからな。

「待ちなさい！まだ話は終わってない・・・流星？」

案の定、華琳が俺を追ってきたが不意に立ち止まる。

流星星とっていたからには、彼女の目には流星星が映つたのだから。
う。

今はまだ昼間だがな。

「昼間に流星星ね。見間違いではないのか？」

「いいえ、確かに流星星が見えたわ。不吉ね・・・」

流星星が不吉か。

日本なら願い事をしてそんな気がするけどな。

つまりは吉兆扱い、こちらとは性質が逆のようだけど。

「不吉ね。なら、さつさと退却するか。どの道、無為に時間を潰すこともないだろうからな」

「そうね。陳留へ戻りましょう。兵たちも十二分に休めたはず、行軍を再開できるでしょう」

俺も兵を纏めに行くとするかな。

ま、行きとは違って帰りの行軍はマシになるだろう。

さっさと帰って、戦仕度を整えて、再度討伐だな。

とはいっても、負傷兵の治療や国への報告、失った兵の補充とその調練に暇がないから即時出立は無理だろうけど。

その間俺は・・・

第十三話 陳留にて 一時の休息（前書き）

累計 P V : 1 4 8 , 4 0 1 ユニーク : 1 8 , 7 8 6 人 でした。
ありがとうございます。

第十三話 陳留にて 一時の休息

「その間、俺は華琳による特別講義を受けていた」

「直衛・・・私も暇じゃないの。私直々に采配とは何たるかを教えているのだから真面目に聞きなさい」

華琳がハリセンを片手に俺の頭を叩く。

講義っていうとどうにも眠くなるので、わざわざハリセンを作って華琳に渡した。

聖遺物使いであるから痛みなのを感じるはずもないのだが、音だけは一っかりでるので音を聞いて起きることにする。

材質は当然木製、結構重くて痛いはずなのだが俺には関係のない話だな。

「痛たた・・・どうにも納得がいかないわね。直衛の頭を叩いているのは私なのに、どうして貴方は痛がらず私が痛い目にあうのかしら？」

「そんなことないぞ。痛たた・・・ほら、俺も痛がっているだろう。それに、木製なんだから反動で華琳の手が痛むのも仕方がないことだと思う」

現実には、与えた衝撃がそのまま華琳に返ってきている様なものなのだが。

鉄柱を木材で殴りつけると言うか、そんな感じだからな。

「罰しているはずなのに、全然与えている感じがしないわ」

「はいはい。それは置いといて、本日の講義の方をよろしく頼みます」

「本日も何も、今日から始めるのだけど。とりあえず、直衛には行軍について学んでもらうわ。これがうまく出来るか出来ないかで兵の疲労度も変わってくるから、重大よ」

行軍、行軍かあ。

確かに行軍は大事だな。

兵を可及的速やかに前線へ送り込み、且つ兵に疲労を与えず戦闘力を保持したまま輸送する。

いくら迅速な行軍、強行軍等で開戦に間に合ったとして、疲労困憊で戦えぬというのでは意味がないからな。

「だからまず、直衛には騎乗の練習をしてもらうわ。貴方、前の討伐戦では騎乗せずに徒歩で移動していたでしょう？ 大方、馬に乗ったことがないからこそその徒歩なんでしょうけど」

げ、なんだと？！

華琳の言うことは確かに当たっている。

俺は馬に乗ったことはないし、だからこそ討伐戦においても徒歩で行動していた。

だが、それ以外にもだな・・・俺は馬が嫌いなのだ。

馬というか動物全般が嫌いというか・・・

猫は手を差し出せば引つかいてくるし、犬は撫でようとすれば噛み付いてくる。

前世の友人の家でインコに触れようとしたときは突かれた。

友人は普通に腕に乗せていたのだがなあ。

ま、そういうわけで俺は動物はあまり好きではない。

好きではないので騎乗なんてしたくないのだ。

「いや、俺は馬に乗らずとも持ち前の俊足があるからな。それに、兵と同じ視点に立って共に戦うという、兵達に近い立場で・・・」

「だめよ。将官は馬上で指揮を執りなさい。将官に与えられた責務は、兵が満足に、万全に戦えるように指揮をすること。決して、兵と共に戦い汗を流すことではないわ」

「だが、そういった将官がいても悪くはないだろう？ほら、共に戦ってくれる将官は心強いな・・・なんて」

「合戦が始まってからなら構わない。貴方の武器は短剣と長剣でしょう？馬上でそれを振り回したところで届かないのだから、そんな

ことをしるとは流石に言わないわ」

よしよし、攻めるならこの線か。

「なら行軍中も騎乗しなくても問題ないだろう？常在戦場の如く、常に陸に足を付けているべきだ」

「強行軍として駆けるときも貴方は馬を使わないとでもいうのかしら。兵もそうだけど、指揮官が疲労困憊で動けないなんて最低よ」

ここで俺は疲れないから問題ないとかいうと、雷が落ちそうだ。

いや、実際に疲れないのだから気にしないでもらいたいのだが・・・

「むむむむむ・・・。華琳わかったよ、今度から騎乗する。騎乗はするけど、今は采配についての講義だろう？だから今は講義をしよう」

「既に講義の最中、直衛は講義と聞いて座学を思い浮かぶのかもしれないけど、当然実技も含まれるに決まっているでしょう」

「どうしても俺を馬に乗せたいのか」

「ええ、乗せたいわ。だから早くしなさい。まずは厩舎で貴方に相応しい馬を見繕わないと」

「厩舎に相応しい馬がなければ乗らなくてもいいか？」

「無ければ買うまでよ。当然、その費用は貴方の給金から引いてお

くわ」

給金、まだ貰った事がない初任給から強制徴収を受けるわけか。

しかも欲しくもない馬代が差っ引かれるなんて・・・

「愚図愚図してないでさっさと行くわよ。それとも、もう一度叩か
れたいのかしら？」

いや、叩いても華琳が痛いだけなんですけどね。

俺が叩かれて厩舎に行かなくて済むというならそれはそれで構わな
いのけど。

と、嫌そうな顔をしていたら再び華琳に叩かれた。

「痛たたた・・・どうしてかしら。手加減無しで叩いたのに全然痛
そうじゃないのだけど」

「頭が堅いからな。考えも硬いんだ」

これ以上文句を言うとハリセンじゃ無しに、華琳愛用の鎌^絶で切られ
そうだからな。

この辺にして渋々付いて行くことにしよう。

流石に鎌で切られて無傷というのはおかしな話になってしまふ。

「ちなみに、直衛は何か希望があるかしら？色だとか気性だとか、
大抵の馬は一通りあるから好きな物を選んで良いわよ」

「特に無いな。というか馬に乗ったことがないのだから、聞かれてもわからん。精々直感で選ぶくらいだ」

厩舎に向かうながら華琳と談話。

いや、これも講義の内か。

とはいっても、俺が馬について詳しいわけが無い。

毛並みなんかで馬の良し悪しが分かるわけでもないからな。

乗って駆ければそれで十分じゃないのか？

まあ、早ければ早いに越したことはないだろうけど。

「経験がないなら温厚な馬がいいかしら？ 気性の荒い馬に乗せて振り落とされるのも、それはそれで見ものではあるけど。今回は乗馬の練習を行うのだから、温厚な馬で行きましょう」

「気性が荒くて振り落とされる？ 気性が荒いとしても鎧が付いているのだから、容易に落馬するとは思えんのだが」

「バランスを崩せば誰でも落馬するわ。乗って停止するだけなら兎も角、それで駆けるのだから十分に経験を積んでいなければ尚更のこと。だからこそ騎兵は数が少なく、練度を上げるのに時間がかかるの。それで、鎧だったかしら？ 初めて聞く言葉ね」

あー、でも確かに落馬で死ぬとかそんな話も聞いたことがあるよな。

となれば、バランスを崩せば鎧があろうとも容易に落馬する危険があるのか。

まして、騎乗しつつ戦闘しようものならどれほどの練度を必要とするのか・・・

でも、華琳の話を聞くと、この世界には鎧がないらしい。

ということは、未だ発明されていない技術というわけだな。

どの道俺が騎乗することになれば使うことになるだろうから、先に華琳に話しておいて俺の分の鎧を作ってもらおうとするか。

「聞かれても俺も詳しいわけではないのだが、確か鞍から馬の側面側に一對の足を乗せるものを吊り下げたものを言う・・・はずだ。これで騎乗戦闘が容易になったとか、そんな話を聞いたことがある」

「なるほど、確かにそれなら騎乗中の安定性が増し、落馬の危険性は下がるでしょう。鎧を用いれば、兵が馬に慣れる時間も短縮され、大規模な騎兵隊を組織することも可能になるわ。直衛、貴方はこれをどこで知ったの？」

「仕えるべき主君を探して、大陸中を西へ東へ旅すれば知識だけは増えるさ。ま、どこの誰に聞いたかは覚えていないが、この大陸から東に海を越えたところにある民族が使っているとか、聞いた奴はそういつてたかな」

まさか鎧は別の世界で学んだ知識です。とは言えないからな。

「大陸の東、海を越えて、か。直衛、悪いけど今日の講義はここで終わりよ。貴方は鎧の設計図を書いて職人に渡してきなさい。草案でもいいけれど、その場合は十分に意図を伝えること。また、それは門外不出の案件とすること。分かつたらさっさと行きなさい」

ということは、俺は馬に乗らずに済むということか。

華琳は、俺が馬に乗ることよりも鎧を軍に普及させることが大事・
・まあ、大事だな。

ともあれ、馬に乗る必要がなくなったのはいいことだ。

代わりに鎧の図面を書けなどという仕事は増えてしまったが・
・何に書けばいいのだ。

紙はあるのか？

この時代に紙があるのかは知らないが、あつたとしても非常に高価なものではないか？

となれば羊皮紙とか、場合によっては木簡や竹簡に書くということだが・
・

まあいい、それは何とかしよう。

最悪口頭で伝えても何とかなる気がしないでもない。

非常に簡易的な形で俺が作ってもいいのだからな。

「言っておくけど、直衛は結局馬に乗るのよ？今回は生憎のところ
鑑が用意できないから延期となっただけのこと。次回の講義は期待
してなさい」

ですよね、そうだと思ったよ。

第十四話 陳留にて 職人の技

「胡車児様、これがご注文の鎧でございます。胡車児様のご希望通りに作りましたが、行違いがあるといけません。どうかご確認のほど、よろしくおねがいします。」

今日は昨日職人に発注した鎧を受け取りに来た・・・のではなく、進行状況を確認する為に来たのだが

もう終わっているとか、どういうわけだ。

華琳が薦めてくれた職人だからといえばそれまでだが、言った次の日に出来てるとは普通は思わん。

しかも、俺の想像通りの出来映えで行違いなんてものはない。

完璧で、そして早い。職人技とはこのことか。

「早いな、実に早い。そして実際に確認するまでもなく分かるが、完璧だと誇れるほどに精巧に出来ている。代金は後で届けさせるが・・・他に何か欲しいものはあるか？」

これだけの成果を出したのだ、代金だけでは足りまい。

何か別途報酬を出してやらねば問題となるだろう。

何せ、結局設計図面は作れず、草案も書けず、口頭説明と手製の簡易鎧だけだからな。

いや、書こうとは思ったのだが、机に向かうとなると妙に眠くなつて一向に進まない。

それで書くのは諦めて、自作で簡易な鎧を作り職人に説明したのだ。もしかしたら、俺は春蘭よりも書類仕事が出来んのかもしれん。

流石の春蘭でも書類仕事で居眠りすることはないだろうからな。

「何か欲しいものでございますか？」

「ああそうだ。私の権限の範囲で賄える物であれば、叶えてやろう」とは言つても、今の俺に出来ることは少ないがな。

未だ給金を貰っていない訳だ、所持金は初めて陳留に来たときに売り払ったコートの売却金くらいしかない。

「でしたら、今後もこのような機会がありました折には、是非とも私共にお任せいただきたく存じます」

む、物品ではなく繋がりが欲しいときたわけか。

これは、どうだろう。

承諾したら職人との癒着になるのか？

腕は確かだから約束せずとも再び頼みに来るとは思うが、契約不履行だと他の職人を頼った際に言われるのは拙い。

何より一番怖いのは華琳だな。

唯才を好んではいるが、癒着とも取れる不正は認めぬだろう。

ある種の贋画はするだろうが、癒着と贋画の判断をするのは彼女だからな。

ハリセンで叩かれるくらいで済めば良いが・・・さて、どうするか。

「胡車児様がお持ちになられた鑑といわれる技術、まさに感服するものでありました。今後も稀代の発明とも思われるものを閃かれた際には、是非とも私共をご利用頂けます事よろしくおねがいします」

なるほど、常日頃の取引ではなく、鑑のような技術開発に際してか。

これなら問題あるまい。

実績があり、華琳が薦めるほどの腕を持つことから、次回も次々回も彼に任せて問題はなかつた。

「良いだろう。お前の腕の良さは拝見させてもらった。その腕が衰えぬ限り、誰にも引けを取らぬ限り、私はここを訪れよう」

華琳の治める都市で一番の腕であれば不満など出ようはずが無い。

ま、口約束といえはそれまでだが、ここまで言った以上は守らねばなるまい。

一先ずは完成した鑑を持って華琳の下へ向かうとするか。

華琳には口頭説明のみで、実際に運用したわけではないのだから正しい心地を聞いてから大量生産に入ろう。

とはいえ、歴史的に優秀であり、不採用とされることはないのだろう。

強いて言えば、生産に掛かるコスト的な面であって、まず採用は間違いないだろう。

「む、なんだ直衛、お前もここを利用しているのか」

物思いに耽っている間にどうやら秋蘭が来ていたようだ。

「いや、今回が初めてだな。そういう秋蘭はいつもここを利用しているのか？」

「ああ。ここで作る矢は精巧でな。また頑丈でもあり重宝している。次の討伐日程も決まったことだから、発注しておこうと思ったのだ」

聞き捨てならないことを聞いた。

討伐日程だと？

いや、確かに今日は朝議があつたが、そんなことを言っていたか？

「秋蘭、討伐日程の件だが、今日そんな話があつたか？俺は朝議は終始出ていたが、そんなことは聞いた覚えがないのだが」

「直衛は物覚えが悪いな。私が知っている以上、少なくとも今朝の朝議で話されたのは確かだが・・・起きているのにも関わらず覚え

ていないとは、華琳様にまた叩いてもらわねばいかな」

華琳も秋蘭も叩くの好きだねえ。

俺は叩かれるのは好きじゃないんだが。

「で、討伐日程はいつに決まったんだ？」

「糧秣、軍事物資、練兵終了時期を踏まえて、討伐時期は来月のことだ。どうやら騎兵の装備を一新するらしく、その為に来月という日程になったと言う話だが・・・それが例の鎧という奴か？」

「ああ、これが鎧だ。一品完成したから華琳に報告、その後試乗会をして満足がいけばそのまま生産。足りぬ点があれば改善といったところだな」

「なら私も付いていこう。私も鎧には興味があつてな。もしそれが華琳様がいうように、騎乗時に有利に働く者であれば騎射も容易にできることだろう。機動力のある弓兵は得難いものだから非常に興味がある」

騎乗戦闘は熟練の兵でなければよほど運用が難しいということか。

俺は馬に乗ったことがないからわからんが、それも鎧によって緩和され運用し易くなる。

ふむ、これで曹魏の軍は極めて精強になるというわけか。

欠点としては、鎧は馬に付けるだけであるから他国も容易に真似をすることが出来るという点。

鹵獲を防ぐことは当たり前だが・・・俗に軍師と呼ばれる知恵者が見たら容易に再現されそうだな。

だが、それまでは情報封鎖を行って間違いあるまい。

少しでも技術発展を遅れさせるのは当然の行いだからな。

つと、秋蘭は既に発注を終えているようだ。

考え込んでいた俺の方をまだかまだかと言った顔で待ち構えていた。考え事の邪魔をしないでくれるのはありがたいが、別に構わないのだけど。

「ほら、行くぞ。・・・直衛のその考え込む癖はどうにかしたほうがいい。戦場で考え込めば敵に隙を見せることになる。いくら手練であろうとも、隙があれば窮地に陥ることもあるのだからな」

「それは俺も理解しているが、どうにも癖というか、な。考えながら行動するということが苦手なんだよ。特に平時は無理。危機的状況なら何とかなるんだけどな」

「ほう。華琳様に常在戦場の心得を説いていた直衛が平時において呆けているのか。大体、華琳様の副官でありながら危機的状況に陥ることが許されると思うのか？」

「許されん話だな。ま、心配せずとも俺が傍にいる限りは華琳をそんな目に遭わせたりしない。そういえば、朝議では討伐日程以外に何か別の話はなかったのか？」

朝議のことを秋蘭に訪ねながら華琳の下へ向かう。

実は朝議に出たことは覚えているのだが、何を話していたか覚えていないんだよな。

仲間が増えたとか、そんな話をした覚えがあるのだけど。

「直衛、やはりお前は駄目な奴だな。朝議で話されたことは、討伐日程、治水工事、後は客将を出迎えたことだ。どうだ、どれか一つでも覚えていたか？」

「討伐日程は覚えていなかった。治水工事も担当ではないので覚えていない。客将については記憶の片隅に微かにある。で、誰が客将で来たんだ？」

「それは記憶にあるとは言わん。先ほど客将といったが正式には客将1名と正規が2名だ。姉者が治安強化の為、陳留近辺を警戒していたところを・・・保護したのだ」

春蘭が保護をするねえ。

春蘭なら不審者を見つけたら問答無用で捕縛しそうなんだけど。

ま、秋蘭が口を濁したということは、そういうことで間違いないのだろう。

「保護か。誰かに追われていたとでもいうのか？」

「・・・姉者が不審者と思い問答無用で捕縛しようとしたただけだ。」

そこで客将である趙雲と打ち合い、陳留にいる私の下まで報が届いたのだ。夏侯惇様を止めてくださいとな」

趙雲?!

趙子龍が陳留近辺にいただと?

趙雲は・・・確か公孫賛の下で武官を務め、その後に劉備の下に向かったと思ったが。

やけに史実と食い違う気がするが、これも俺が介入しているせいかな?

とはいっても華琳の方針に口を挟んでいるわけでもないのだが。

「それで秋蘭が三人を保護したと。そんな経緯でよくも2人が任官、1人が客将になったものだ」

「趙雲は華琳様お手製の醸造酒を甚く気に入って、暫しの間客将となるようだな。華琳様を自らの目で見極めるまでは任官しないといっていたが・・・さて、どうなるか」

華琳を受け入れられぬ者は恐らく王道寄りの思想。

彼女の道は霸道であり、徳による統治を目指す王道とは異なる。

とはいっても、民からしたら同じだとは思うがね。

結局、第一に求められるのは身の安全なのだ。

これは武を無しに成立することはないのだから、王道もまた覇を必

要とする。

趙雲は歴史的に見て劉備の配下であったことから王道寄りであろうが……

「春蘭と打ち合えるほどの武を持つのであれば是非共に戦いたいものだな。武官が多ければ多いほど攻撃の幅が広がる。他の2人についてはどうだったんだ？」

「稟と風のことか。稟は元々華琳様に仕えるつもりだったようであつたに船だと喜んでいたな。風も同様だ。共に文官で今は華琳様が相手をしていると思うが……どうかしたか？」

稟と風か。

む、思い出したぞ。郭奉孝と程仲徳だと言っていたな。

確か、真名も交換したはずだ。

朝議の時間は寝ぼけていて覚えていないけどな……目を開けたまま寝るのが得意なんだ。

それでいながら返事も出来る。地味に誇れる特技だったからな。

「いや、秋蘭の話聞いて思い出したのさ。稟と風は文官扱いで、今度の討伐戦の如何によつて軍師の採用が決まるんだったか？現状、華琳の下には文官が少ないから嬉しいかぎりなんだが」

これで曹操陣営の筆頭軍師が2名と劉備陣営の名将が一人、華琳の下に来たわけか。

しかも史実より早い加入。まだ、黄巾の乱も兆しはあるものの始まってはいないのだ。

これはかなり良いスタートを切れるのではないだろうか。

「そうだな。私から言わせてもらえば、姉者も直衛も文官の真似事くらいの処理能力があればうれしいのだが」

それは無いもの強請りと言っやつだ。

作業効率を考えず、期限のない仕事であるのなら問題はない気がするが

どちらかを満たせと言われると俺では厳しいだろう。

「俺は武官としての責務を果たすので手一杯だ。とても文官の真似事など出来んよ」

手が足りないなら公募するように進言してみるか。

とはいっても刺史の立場では給金の問題が生じるであろうから、文官を集めるのは州牧になってからになるが。

前の討伐戦の戦果も報告したものの、結局州牧にはなれなかったかな。

あまり漢王朝が機能していないのだろうか？

時期的に皇帝は霊帝であろうから、機能していないのも当然だとも

言えるのだが。

ま、流石に次の討伐戦で戦果報告を行えば州牧になれるだろう。

前回と同様に、寡兵よく大軍を破れば間違いあるまいし、今度は趙雲、郭嘉、程？と将官には不足が無い。

賊退治で将官全員を連れて行く必要があるのかという面子だからな。

「武官としての責務か。確かにそうだな、直衛には華琳様の副官として華琳様を護らなくてはならない。他に感けている余裕はないか」
いや、文官の真似事が出来ぬからそういったのだが、秋蘭は何やら勘違いしてしまったようだ。

これ幸いと、文官仕事はこの際放棄することにしよう。

確かに、華琳を護るということは大事だからな。

念願の騎士の役柄でもあることだし、専念して務めるべきだろう。

「だから、直衛はまず騎乗練習から始まるといい。華琳様の傍にいるには必要不可欠なことだから」

・・・お前もか、秋蘭。

第十五話 陳留にて 火急の報

「直衛、お前もたまにはやるではないか。この、なんだ、鎧というものは実に勝手が良いぞ」

自身の愛馬に鎧を付け、駆け回り小躍りしているのが春蘭。

どうやら、鎧が甚く気に入ったらしい。

俺が発明したものではないのだが、春蘭の喜び具合を見ると誇らしくなる。

盗人猛々しいとはまさにこのことだが、生憎この世界では俺が先に世に出してしまったからには仕方あるまい。

「気に入ってくれたのは良いが、しつかり戦果も挙げて貰わないと困る。次の賊討伐に間に合うよう、昼夜問わず緊急生産を行っているんだ。経費も余分にかかっているのだからな」

前に作った試作品・・・というか、完成品を用いて試乗したところ、将官、特に春蘭や趙雲には好評だった。

鎧の位置は個人差があるものの、馬上での安定性は向上され以前の騎乗突撃よりも迅速で、且つ強力な行動が可能であるらしい。

主に騎兵を指揮する将官だけでなく文官である稟や風などからも好評を受け、結果、満場一致で鎧の導入が決定された。

そして今現在、急ピッチで鎧の生産が行われている。

指揮を執る将官を第一に、部隊運用に欠かせない下士官に配備、その後騎兵隊に配備を行う。

かれこれ、緊急生産を行っている期間は3週間近くになるが、配備率は7割程度。

職人の疲労による生産性の低下もあるが、何より材料の入手に時間がかかっている。

緊急的に生産する際は、大抵の場合供給量を上回る需要が発生するために、物価の上昇が起きる。

が、今回は物価の高騰を防ぐ為、陳留だけでなく周辺都市にまで買い出しに向かうことになり、材料入手までに多くの時間を要することになった。

ま、その時間的な口スを考えても期日までに間に合うというのだから、職人の腕というものは実に心強い。

「わかってる、わかっている。これだけの品なのだ、しっかりと戦果は出す」

「ああ、そうしてくれ。後、配備が行き渡った兵には鎧に慣れるよう、よく調練を行ってくれ。孔子に論語だとは俺でも思うが、不慣れでは逆に効率が落ちるかもしれないからな」

「当然だ。ではな直衛、私はもうひと走りしてくるぞ」

春蘭は俺の話を分かってくれたのかそうでないのか分からぬまま行

ってしまった。

ま、春蘭に鎧が渡されたのは今日だから仕方がない話でもあるか。

春蘭の鎧は使う都度に改善要求が為され、完成品を渡すのに3週間もかかってしまった。

主に騎兵を運用する彼女だからこそ、妥協など出来ぬ案件であったのだろうが些か妥協点が高すぎると思わないこともない。

「姉者は相変わらずだな。斯く言う私もそうなのだが、鎧は実に良いものだと思う」

「なら、鎧を生かして弓騎兵隊でも新設したらどうだ？ 騎馬兵の機動力を生かしつつ、弓兵による射撃を行うというのは強力だと思うぞ。偽装退却という戦術もあるわけだからな」

「弓騎兵か。なるほど、確かにそれは良い考えだ。実際に運用をしようと考えると今回の賊討伐には間に合わないが、今後を考えると十分検討の余地がある」

弓騎兵隊を新設することができれば、合戦において非常に強力な遊撃部隊となることだろう。

側面や後方に回り込んで騎射を行い即時退却する一撃離脱戦法を始め、離脱すると見せかけて後方射撃を行う偽装退却も非常に有効な戦術である。

ま、弓騎兵は両手を使うという関係上、かなりの騎乗演習は行わねば実用化は難しい。

今回の討伐戦は間に合わないのは当然だが、次の合戦までに間に合うかどうか・・・

それでも、運用できるようになれば活躍は期待できる部隊ではあるのだが。

「弓騎兵に関して一日の長があるのはやはり遊牧民だろう。交渉を行うには難のある相手かもしれないが、成功すれば得るものは大きいと思うぞ」

「遊牧民と言えば匈奴だな。彼らの使う弓は古くから漢を苦しめたという。確かにその弓が手に入れば、より精強な弓騎兵が編制できるだろう」

「ま、そうはいつでも騎兵以外に鎧が行き渡るのは相当先だろう。現状の生産量をこのまま続ける訳にもいかないわけだからな」

「その間は情報収集に徹するでしょう。どうやら弓騎兵新設の草案を書くだけでも解決しなければならぬ案件は多そうだからな。では、私はこれから弓騎兵新設の検討に入らせてもらおうよ」

思い立ったが吉日とでもいうのか、秋蘭は去って行った。

が、秋蘭はいつの間にかいたんだ？

俺は春蘭の馬に取り付ける鎧を渡す為に厩舎に来たのだが、その時に居たのは春蘭だけ。

気が付けば秋蘭がいて、つつい話をしてしまったが・・・

ま、細かいことは気にしなくてもいいか。

同じ職場で働いているのだからどこかで会うことも十分にあるだろう。

「お兄さんはこんなところで何をしてるんですか？」

「ッ！なんだ、風か。驚かさないでくれ」

またしても、気が付けば隣に人がいるわけだが。

彼女は最近、というか三週間前に華琳の下に来た。

姓を程、名を？、字を仲徳、真名を風。

文官としての才は極めて優秀、且つ知略にも長けている典型的な軍師役と言えば良いのか、華琳からの評判は上々のようである。

これもまた史実通り・・・女性でなければだが。

俺と彼女の関係はそれほど親しいと言うわけではない。

会議の場や賊討伐の軍議などの場では話すが、春蘭や秋蘭ほど雑談を交えて親睦を深めたことがないのだ。

武官と文官という畑違いであるのが原因か、あまり調練場や厩舎に來ないからな。

俺が庁舎に行けばいいのかもしれないが、書を読むのは眠くなるから

遠慮している。

だから、あまり接点のない彼女がここにいるというのは珍しい話で、何か用があるのだろうか。

「今は何もしていないな。先ほどまでは春蘭、秋蘭と話していたけど。それはそうと、風がここにいるのは珍しいと思うのだが、どうしてここにいるんだ？」

「風ですか？風はお兄さんを探していたのですよ」

俺を探していたのか。

華琳か誰かが俺を呼んでいて、それで風が使い走りにされたということだろうか。

探されるほどに下手を打ったことはない・・・と思うんだがな。

「俺を探していたのか。それは手間をかけさせたな。で、誰が探していたんだ？」

「風がお兄さんを探していたのです。場合によっては華琳様を探していたともいうかもしれませんねー」

風が俺を探していて、理由は華琳にも関係がある。

やはり使い走りにされているのか、もしくは彼女と俺双方に関わる問題であると、そういうことなのだろうか。

「ということで、お兄さんは出撃の準備をしてください」

って、おい！それじゃ理由がわからんぞ！

「どうしたのですか、お兄さん。そんな不思議な顔されても風にはわかりませんよ？」

「いや、ちよつと待つんだ。何故俺が出撃の準備をする必要があるんだ？賊討伐までは後1週間あるわけだが、何か別の案件でもあるのか？」

来週攻める予定だった賊軍が動き出したとか、そんなことだろうか？

一番可能性がありそうなのは、その賊軍に隣街が攻められて救援要請を出してきたのかなのだろうが。

もしそうだとしたら、前は門前払いをしていたのに豪く厚顔無恥な話ではないだろうか。

「お兄さんは、南東にある隣街を御存知ですか？」

「ああ、知っている。先月かな？華琳たちと賊討伐に向かった先がその南東の隣街だったからな」

「その隣街ですが、賊によって滅ぼされてしまったようですねー。それで避難民が華琳様の治める陳留へ向かってきているとのことですよ」

なるほど、つまり避難民を保護しろというわけか。

だが、どれだけの人数を保護するかは知らないが大丈夫なのか？

受入数によつては間違いなく陳留の経済状況を圧迫するだろう。

勿論、後々の成長を考えれば人口増加は好ましい話ではあるのだが。

「ということは、避難民を保護する為に兵を出せということではないのか？」

「・・・ぐうー」

「寝るんじゃない！というか、この流れで寝れる余裕なんてなかっただろう」

「お兄さんは細かいですねー。保護するのも当然ですが、避難民を追つて賊軍が迫ってきているようです。斥候を放った結果、総勢4000名ほどと言われていますね」

あれ？前の討伐戦では、根城に残っているのは2000名だとか言っていた気がするのだが。

それが4000名まで増えている？

一体どこから湧いてきたというのか。

「賊軍4000か。前にも4000名を相手にしたが、一体どこから兵が出てくるんだ」

「賊という存在が罷り通れば、民は容易に賊になります。彼らは搾取る側ですからねー。その中には元隣街の者も含まれていると思いますよ」

よくまあ、そう易々と賊に変わるものだ。

それでいて民を襲うことが出来るなどと・・・昨日まで近所だった奴もいるだろうに。

「やれやれな話だな。ともあれ状況は理解した、至急出撃の準備に移る」

「よろしくお願いするのですよー。風も風で準備があるので、また後でお会いしましょう」

なかなか思い通りにはいかないものだな。

予定より1週間早い出陣ということで、騎兵全員に鎧が揃っていない。

それでは部隊としてムラが出来るから、騎兵は春蘭と趙雲で鎧を持つ者と持たぬものに別れて編成か。

どちらが優れた騎兵を指揮するかで揉める事が容易に想像できる話だな。

そして、それを仲裁する秋蘭も苦勞するのだろう。

さて、俺も戦いの準備を始めるとするか。

前とは違い指揮官ではなく華琳の副官だが、それ故に尚更無様な真似は出来ないだろうからな。

それに、武器も巧く隠さなくてはいけない。

Yetzirah スルースワルキョーレ
形成によって戦雷の聖剣を具現化するのはいいが、何も無いところから武器が現れるのは拙い。

前は混乱状態だったから誰もが見落としたのかもしれないが、今回はそうはいくまい。

予め具現化しておくか、もしくは筒のようなものを背負ってそこから取り出すかのようにするか。

どちらでも構わないのだが、対策をしておかなくてはいけないだろう。

ま、基本は短剣を用いるから、聖遺物を使う出番はないのかもしれないがね。

「戦としては二度目、副官としては初陣。足を引つ張らない程度には頑張るとしようか」

第十六話 決戦 前編

「ねえ、直衛。私は言っておいたわよね？私の聞き間違いかもしれないからもう一度聞くけど・・・貴方の馬は？鎧はどうしたのかしら？」

「いや・・・それはだな、華琳から騎乗の師事を受けたわけではないし、まだ手配するのは止めておこうかと思って俺の分は他の者に回してあるんだ」

決して、馬に乗りたくないから先延ばしにしていたとかそんな事実はない。

確かに、華琳からは好きな馬を選んでよいと言われていたし、鎧は将官を優先に配備するようと言われていた。

だから乗る乗らないは兎も角、準備だけは出来ていないと問題と言えは問題なのだ。

「そう。確かに、私の講義ということで貴方を乗馬させようとしたわね。でも、準備だけはしておきなさいと言ったはずよ？」

「それは重々承知なのだが、賊討伐も近くてな。少しでも戦果を上げれるように、先に兵らに配ったんだ」

乗らないやつに配備するよりも、乗る奴に配備したほうが意味がある。

俺は馬に乗らずとも馬よりも早く走れるわけだから、そもそもいないわけだしな。

「ま、今回はそういうことにしておきましょうか。今はそれほど遊んでいる余裕はないのだから」

俺は遊ばれていたのか。

ま、余裕がないのは確かだろうけどね。

今は隣街から来た賊を討伐しに行軍中であり、隣街からの避難民も保護しなくてはならない。

戦力差も前と同じく賊軍4000に対してこちらは1000であり、4倍の戦力差がある。

打ち破るだけなら実績があるが、護りつつ打ち破るのはこれまた至難の業だろう。

何せ、避難民は軍隊と比べて圧倒的に数だけはあるものだから、錯乱でもされようものなら支障をきたすどころの騒ぎではないのだから。

「報告します！このまま進軍すれば、半刻後には避難民に接触。更に一刻後には賊軍と接触するものと思われます。規模は4000、歩兵のみの編成です」

む、報告内容が距離ではなく時刻だと？

一刻は2時間、半刻は1時間。

避難民を接触した後、一刻後に賊軍と接触するとは思った以上に余裕がなかったな。

ところで、普通の斥候は到着時刻ではなく到着予想距離で報告してくるのだが・・・それなりに知識があるということだろうか？

それに見覚えがない風貌をしているし、彼女は一体・・・

「思ったより余裕がないわね。風、貴方には避難民の誘導を任せるわ。無事に民を陳留まで送り届けなさい賊軍には私達が当たるから、後背を気にせずに頼むわ」

「御意！華琳様からの命、身命を賭して達成いたします」

ただの斥候かと思いきや、どうやら華琳と真名を交換しているようだ。

一体彼女は誰なのだろうか。

尋ねようにもそんな余裕はないだろうし、何より彼女は既に走り出していた。

移動に馬を用いていないことから、曹魏の将官ではないのわかるのだが。

「気になるかしら？あの子は楽進、隣街で義勇軍として戦っていたそうよ。今回の件も彼女が報告に来たからこそ迅速に動けるわ。少し使ってみて、使えるようなら将官に取り立てるつもりよ」

へえ、彼女が楽進か。

着々と魏を象徴する将官が揃ってくるわけだけど・・・これってまだ黄巾の乱が本格的に始まっていない段階だよな？

戦力過剰で俺の出番がなくなっているような気がする。

「なるほど。ま、華琳の御目に適ったのなら確かな実力者なんだろう。だがどうする？彼女はこのまま進軍すれば、と言っていたが？」

今回の場合、このまま進軍すれば3時間後に賊軍と接触する。

これを利用して、華琳が避難民と接触した位置で停止すれば賊軍と接触するのはまだ先の話となり、浮いた時間を休息や待ち伏せに利用することが出来るのだが。

さて、華琳はどう采配を振るか。

「風の報告通りに進むわ。民に被害を出さない為にも賊との間に距離を空けて置くことは必要でしょう」

隣街から必死に逃げて来た彼らは既に限界を超えているとも言ってもいい。

賊軍との距離を開けることで避難している民は安心を得るだろう。

実際に軍で護衛するという手段もあるが、それでは戦闘になった時に被害が出る危険性がある。

傍に軍がいることで安心するかもしれないがね。

「曹操殿、聞けば既に民は半刻にも満たぬところにいるというではないですか。ですが、一向に行軍速度が上がる気配が見られないのはどういいうお積もりかな？」

楽進との入れ替わりで趙雲が華琳の下に来た。

どうやら鎧はお気に入りのようで、なんとも齒痒い限りだ。

要件としては行軍速度に不満があるようだが・・・敵を前に焦れているのか？

「悪戯に行軍速度を上げて民の不安を煽ることは出来ないわ。それに、合戦のときが迫っているのに無為に兵を疲労させることはできない。趙雲も隊を率いる身分なのだから、それくらいは分かっていると思うのだけど？」

「曹操殿の深謀、誠に感服する。が、我が騎馬隊も本隊と同等の速度で歩む必要はないのではないかな？騎兵には騎兵の行軍速度があり、先に民と接触し、彼らを安心させたいのだが」

なるほど、先に向かう為の許可が欲しいというわけか。

確かに騎兵だけであるのなら問題ない。

行軍は最も遅い部隊の速度を基準とする為、騎兵にとっては非常に窮屈である。

今回の件はそういった不満もあるだろうが、民を慰撫することは名目としては十分、華琳も恐らく許可を出すだろう。

「なら、趙雲隊は先行して民を慰撫してもらおうかしら。けれど、くれぐれも先走って賊軍に当たることのないように。鎧の性能を実戦で確かめたい、と考えているわけではないのでしょうか？」

「確かに鎧は素晴らしいものですが、隊を預かっておきながら勝手な真似はしませんぞ。それにしても曹操殿も気前が良い。聞けば鎧は新技術というではないですか。それを客将の私にまで下さるとは」

鎧も元々は門外不出のもの、今回のように客将である趙雲に渡したのは多少の論争になった。

春蘭は客将である趙雲に鎧を渡すことは出来ないと反対を主張。

稟は趙雲がいる間は鎧を騎兵に配備を行わないと徹底的な守秘を主張。

風は兵に鎧を配備する以上、趙雲に隠しても無駄であると賛成を主張。

秋蘭は鎧が容易に造れることもあり、風と同様に賛成を主張。

これを聞いて、俺はよくもまあ考えるものだとかんがえていた。

華琳にも意見を聞いてみたところ

「趙雲ほどの将が鎧を見てその利便性に気が付かないはずがないわ。だから趙雲だけに鎧を渡さないという春蘭の意見は却下」

「選ぶなら稟の意見が妥当だとは思っけど、趙雲に敢えて鎧を渡し

て器の広いところを見せても良いわ。それで趙雲が正式に仕官してくれるというのであれば、鎧を渡すことは何の問題でもなくなのだけど」

華琳は正直どちらでも良い様な雰囲気だ。

俺の見解だが、ここで惜しんでも史実通りに行けば反董卓連合で諸侯に見せることになる。

だったら、少しでも鎧に慣れる事と趙雲への好感度上昇を見込んで渡したほうが良いと思って・・・

「そういえば、直衛はこの案件に何も意見していないけど、貴方はどうなのかしら？」

「・・・すまない。既に趙雲には鎧を渡してしまったんだ」

俺はこれでもかというほどハリセンで頭を叩かれた。

といった経緯があるのは趙雲は知らない。

さて、華琳はなんと答えるのだろうか？

「あら？趙雲にはこれから私の下で指揮してもらうのだから当然のことよ」

「ははは、曹操殿にですか。既に稟や風が曹操殿に仕えているというのに私が必要と？実に魅力的なお誘いですが、今は戦争中、この話は何れ後ほど・・・」

「待っているわ。では趙雲、先に命じたとおり趙雲隊は先行して民を慰撫しなさい。彼らの山を越えての強行軍、その心労は計り知れぬものがあるでしょう。我が軍の威容を見せつけ、民の不安を払拭させるのよ」

「は。曹操殿の御命令、必ずや達成して参りましょう」

命令を受けるや否や、趙雲隊は駆けていったが・・・本当は、鎧の性能を一刻も早く確かめたいだけなのではないだろうか。

訓練と実戦では大いに異なる点もあるだろうから、実戦での性能確認は待ちに待った機会に違いないからな。

「はぐらかされてしまったわね。ねえ、直衛。貴方は趙雲が私の下に来ると思つかしら？」

「趙雲は武に優れた武将であるのは確か。彼女に然るべき機会を与えることは勿論のこと、後は霸道というものを彼女が認められるかどうかといったところではないか？」

兵を指揮して大軍を動かすというものは、武官にとって最大の名誉だろう。

また、武に誉ある者であれば天下無双の称号を得たいと思うだろうし、精進したいとも思うはずだ。

幸い、華琳の下では後者については十分満たされている。

前者に関してはこれから次第であろうが、客将の身で且つ全軍が寡兵でありながら隊を与っているのだ、不満はないだろう。

趙雲が望むであろう環境は整っている・・・酒も華琳特製の物があ
るからな。

となれば、史実で劉備陣営に属した彼女が、華琳を主として認めら
れるかという点に掛かっている。

「武官であれば、力無き指導者に統治されている民の末路を容易に
想像できるでしょう。文官が現実から乖離した理想論者であるとは
言わないけれど、彼らの多くは武を軽視する傾向にあるのは違いな
いわ」

「差し詰め趙雲は、理想と現実の間で揺れているのよ。彼女にもそ
れがわかつている。だからこそ客将という立場で私の下にいる。理
想が実現可能なものであるかを見極める為にね」

「尊王賤霸というやつか？俺は儒学に疎いがそれくらいは分かる。
ま、第一に命だろうから霸道のが普通だと俺は思うけど」

徳を以て人民の心を獲得し天下を取る、これまさに王道である。

武を以て人民を掌握し天下を取る、これまさに霸道である。

ふむ、実に論争を巻き起こしそうな話題ではあるが・・・

実際に今必要とされているのは武で間違いない。

民は生死の境目にあり、武を持たずして彼らを救うことはできない
のだ。

あとは趙雲がこういった現実をどう捉えるか、という話。

「霸道が王道を兼ねる、つまりは霸王であれば趙雲も文句は言わないだろう。だから、華琳はこれまで通りに振舞っておけば十分なんじゃないか？」

「そうね。直衛の言うとおり、これまで通りで問題ないでしょう。そうすればあの趙雲でも・・・」

とはいったものの、華琳が本当に霸王を目指しているのかどうか気になる部分はある。

こう、なんというか、本当は【天下の女の子を独り占めにしたい】とか思ってるのではないか？

普段の様子からすれば、こちらのほうが真実な気がするんだよね。

「ま、それもこれも賊軍を蹴散らしてからの話だけどね。華琳、後世まで語り草となるような采配を期待していいのか？」

「ええ、勿論。だから直衛は私の采配をよく見て盗み取りなさい。以前のような想いをしたくないなら尚更ね」

先見の明がないのだから、華琳の言うとおり二度はないようにしなければならぬ。

思えばこの世界に来る前から見越しが甘かった。

あのアンケートも知ってさえいれば、武力を100にすることもなかったのだ。

聖遺物が手に入るなら武力は1でも良かったわけで、代わりに政治や統率を100に出来たのだから。

「やれやれ、これ以上後悔することのないようにしたいものだ」

だが三時間後、寡兵にて動いたことを大きく後悔することになる。

目下に布陣する賊軍は騎兵1000を含む総軍5000。

華琳の率いる総軍1000を遥かに上回る5倍の兵力であった。

第十七話 決戦 中編（前書き）

未筆事項

1・桂花登場のイベント

桂花を出すタイミングを逸してしまった予感
次の拠点イベントらしきもので出せればいいのだが…
出せなければ袁紹陣営で参加予定

懸念事項

1・物語の進行速度

緩やかに前進…であればいいが少しも進んでいない
第二十話までに州牧に就任予定
反董卓連合など夢のまた夢

第十七話 決戦 中編

「華琳、俺の気のせいかもしれないが、賊軍に騎兵がいるように見えるのだが？」

避難民と多少の接触を終え賊軍へ向かい行軍を続けたところ、目下に布陣する賊軍は、斥候の報告とは違い騎兵を含んでいた。

しかも、たった今到着した俺達とは違い賊軍は既に布陣を終えているときた。

いやはや、一体これはどういうことなのか。

「言われなくとも分かっているわ。恐らく、騎兵の行軍速度を考慮して歩兵を先行させたのでしょう。だから風の報告には騎兵に関するものがなかった」

騎兵はその行軍速度から歩兵の2倍から3倍までの速度を出すことができる。

いや、強行軍であればそれ以上の速度で行軍することが可能だ。

即ち、賊軍は騎兵の行軍速度を予め加味した上で、兵種ごとに出陣時間をずらし到着時間を合わせたということになる。

「はつきりとした数字は分かんが見た目だけでも1000近い騎兵がいるんじゃないか？こっちは・・・趙雲が率いる騎兵200のみで、とても勝負にならん気がする」

「そうね。こちらは総軍1000であり、賊軍は歩兵に騎兵を加え5000前後。歩兵だけならまだしも、こちらの総軍と同数である騎兵は非常に脅威。で、だから逃げようとも言つのかしら？」

「冗談、下がるわけが無い。未だ避難民は移動中であり、撤退でもしたら彼らに被害が及ぶのは間違いないだろう。それに、この状況で潰走すれば敗北は必至だ」

立ち向かって勝てるかどうかも疑問が残るがね。

だが、賊軍にしては手の込んだ指揮をするものだ。

こちらが不利と見るや退却出来ぬように、彼らは敢えて民を逃がし、避難民としてこちらの足を引っ張る状況を作り出したのだ。

それに加え、総戦力を悟られぬよう騎兵を後出して戦場に送り届けた。

騎兵1000という威圧感も相当たるものだが、何よりそれを前にして逃げ切ることとは不可能に近い。

「だから敗北は許されない。必ずここで賊軍を打ち倒さなければならない。戦力差は5倍であり、敗北は必至とも言える状況でも、私達は逃げる事が許されないのよ」

「既に援軍要請は行つたのだろうか？ならば、後は時間を稼ぎつつ避難民を護ればよいのだが・・・」

既に陳留へ援軍要請を行つた。

寡兵での戦いは窮地に陥る原因となったのだが、前回と同様に賊軍に挑むには訳があった。

今回は華琳が支配する土地でない為、他領主を無為に刺激することは出来ず、賊軍討伐という名目を掲げ、寡兵にて行った。

今回は華琳が統治する街の民ではない為、徒に他領主を刺激することが出来ず、これもまた賊軍討伐という名目で寡兵にて救助を行っている。

だが、ここに至っては賊軍の規模が大きく、また華琳が治める陳留にも近いため、他領主に対する配慮が不要になった。

いや、現実には配慮する余裕がなくなったといえる。

大規模に兵を動員することは、都におられる霊帝を刺激することになるだろうが、こればかりは仕方あるまい。

「陳留に残しておいた風と秋蘭には事前に命じておいたわ。万一に備えて援軍の準備をしておくようにと。だから、報を受け次第、援軍を率いて向かってくるはずよ」

「強行軍で来たとしても間に合わんか？流石に5000名全員が戦力となるわけではないのだから、防戦一方であれば時間を稼げそうだと思うんこともないが」

戦場にいる将官は、華琳、春蘭、稟、趙雲と俺を加えて5名。

指揮兵数は、華琳と俺が本隊で300名、春蘭が歩兵で250名、

稟が弓兵で250名、趙雲が騎兵で200名。

この総軍にて賊軍5000を止めなくてはならない。

歩兵を止めるのはまだ手立てがありそうだが、問題は如何にして騎兵を止めるかという点だろう。

相手にするのは最前線の正面戦力。

歩兵の大多数は遊軍となるはずだが、騎兵に関してはその機動力から遊軍になり難い。

側面や後背を突かれぬように対処する必要がある。

「援軍到着まで持ち堪えるのが私達の仕事。幸い騎兵の機動力ではこちらが優っているのだから、これを使わない手はないわ」

騎兵には騎兵にて対処、全ては趙雲次第というわけか。

いくら曹魏の軍が精強であるとはいっても歩兵で騎兵に当たるのは自殺行為。

鎗衾でも敷いて堅固に護れば歩兵でも十分戦えるのだが、兵が少ないと言う点を考慮すれば厳しいことには変わらない。

必然的に騎兵に当たるのは騎兵しか術がなく、歩兵に当たるのも歩兵になる。

賊は物量に優れるが質で劣り、自軍は物量は劣るが質に優れる。

ふむ、こう評すると勝てる気がしてきた。

英雄譚というものは大抵の場合、寡兵で質に優れた側が勝利するだろう？

「趙雲頼みか。騎兵への対処も綱渡りだが歩兵も甘く見ることはできんな。華琳、今回の賊軍に指揮官はいると思うか？」

「当然賊軍を統括する指揮官がいるのでしよう。迅速な行軍が可能であることも、隣街の民を組み込んだ新設の軍を纏め上げるのも指揮官無しに出来ないわ」

総軍で5000ともなる軍に指揮官がいないなど到底考えられぬ話であり、聞くまでもないこと・・・

なのだが、その割には布陣がお粗末なのが気になるんだよな。

「指揮官がいる、確かにそれは俺もそう思っていたのだが・・・賊軍が布陣、あれは俗に言うところの方円陣って奴じゃないのか？荒野での会戦なら横陣や鶴翼陣を選択するのが一般的だと思ったのだが」

普通は正面戦力が最も多くなるように攻撃面積を多く取る。

横陣はその尤もたるもので、部隊を横一列に並べるだけのもの。

局所攻撃や分断攻撃に弱い陣形でもあるが、基本的であり、まともな訓練を受けていない民だとしても運用上問題のない陣形であるといえる。

鶴翼陣であれば、本隊を中央に敷き両翼に騎兵でも配置することにより、会戦時に迅速且つ容易に包囲殲滅を狙うことが出来る。

訓練を受けていない民が行うには些か難がある陣形だとは思うが、両翼の騎兵さえ機能すれば問題なく包囲が可能である為、これもまた運用上は問題ない。

だが、何故か賊軍は方円陣をわざわざ敷いている。

待ち伏せなのにも関わらずだ。

「考えられることとしては援軍を待っているか、もしくは輜重隊を待っているかといったところかしら？ 賊軍の行軍速度は輜重隊の行軍速度を遥かに上回っているわけだから、後者が適当でしょうね」

「強行軍で進行したものの、糧食が無い上に疲労困憊で仕方なく停止していると言うわけか。正規の軍隊ではなく寄せ集めの賊だからこそ起こりうる問題である」と

なるほど、と言いたくなるがそれでも何か違う気がする。

糧秣に関する問題は確かにあるような気がするが・・・それ以外の理由で方円を描いている気がするのだ。

これは俺の勘に過ぎないのだが、なんというか方円の中心で誰かを崇めているのではないかと。

いや、まさかそんなことはあるまい。

避難民の中に賊軍に慕われる者がいて、それを追って賊軍が移動し

ていた？

そして目的の人物を方円の中心に据え、今まさに崇めているだとか？
妄言もいいところでまったく根拠の無い話だが、ふと思いついた推測が頭から離れない。

「どうやら当たりかしら？直衛も見てみなさい、彼らは馬から降りて方円陣を組み始めたわ」

華琳にそう言われ、再び賊軍の陣を見れば確かに騎兵が馬から降りて方円陣へ向かって駆けて行く。

騎兵を1000名も用意しておきながら、馬から降りて歩兵と友に方円陣を組んで一体どうするのだろうか。

目前に俺達がいるにも関わらずそんな真似をするとは、本当に指揮官がいるのだろうか？

「んー、舐められているとか？俺の目にはそもそも眼中に無いといった風にしか取れんが」

「更にこちらに背を向けている者もいるわね。挑発としては実に効果があるものだけど・・・直衛、貴方はどう思うかしら？」

「先に言った通り、こちらが眼中に無いのか。もしくは別の案件があるのか。遠目に見ているので正確にはわからんが、実は方円陣ではなく、中央に何かを据えて崇めているのではないか？」

「賊軍に別の案件ね。直衛の言ったことは兎も角、確かに今回の賊

軍の動きはおかしいわ。そもそも、彼らには避難民を襲う必要が最初から無い。既に街を襲って奪えるものは奪ったのだから、今更民を襲う理由がないのよ」

確かに華琳の言うとおりか。

避難民を襲ったところで得るものは少なく、それならば他の街を攻めたほうが余程有意義だ。

史実でいう、曹操が劉備を追う展開である長坂の戦いのように、天下の覇権を賭けた理由があるなら兎も角、賊軍に明確な理由があるとも思えん。

あれこれ悩んでは見たが、彼らは無計画にも民を追っただけなのだろうか？

「賊軍の事情はわからんが、結局どうするのだ？彼らは馬から降りて呆けているようだが、攻めるのか？」

「脅威であつた騎兵が無力化されているのはまたとない好機、攻める以外にないでしょう。趙雲に伝令を出しなさい。騎兵を以て敵の馬を無力化しろと」

馬さえいなければ相手は歩兵のみ、十分勝機はある。

何より騎兵の行軍速度でなければ十分振り切れる、つまりは後退することも可能ではあるのだ。

故に、騎兵の存在を散々危惧していたのだ。

ここにきて打開策が見つかったのは運がいいとしか言いようがない。

「弓兵は敵兵が密集しているところを中心に斉射。本隊を含む全歩兵で敵軍正面を押さえるわ。直衛、期待しているわよ」

「ああ、任せろ。俺が先陣を切って呐喊、兵らに進むべき道を示してやるさ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5248z/>

恋姫無双で就職中！

2011年12月25日21時53分発行